インフィニットストラトス　　白の消失、黒の出現

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニットストラトス　白の消失、黒の出現

【Ｎコード】
Ｎ５５４２Ｘ

【作者名】
ケン

【あらすじ】
最近、自分の成長に焦りを感じ始めてきている一夏。
気分を変えようと散歩に出かけた。
そこで一人の女性と出会い
女性の言葉で一夏は彼女たちに抱いている
感情に気付き、復讐を誓う。

プロローグ

そこでは一人の少年と3人の女性が立っていた。
「なぜだ！なぜ、お前がそこにいる！？」
一人の女性が叫んだ。
「彼はこっち側の人間になったのよ。貴方達に復讐するためにね？」
「ああ、そうだ」

「何かの間違いだよね？」
「そうだ、何か弱みでも握られてるのか？」
少年に恋していた彼女たちは悲痛な叫びをあげる。
「違う、俺は自らの意思でこいつらに入った」
「な、何で？！」
「何でだって？ふざけんな！」
「「「「！！！！！」」」」
「今まで散々、俺を振り回してコケにした癖に今さら、俺が寝返ると、
帰って来いだとか何だとか言うが、
もうてめえらにふりまわされんのは、こりごりなんだよ！」
「私達は別に貴方をふりまわしてなんか・・・」
「しらを切るつもりか？」
「「「？？？？」」」
「てめえらはこいつに今まで何をしてきた？
こいつの事情も考えずに特訓を提案したり、こいつが嫌がってんのに、
無理やり付き合わしたり、こいつが女の子と喋っただけで、
勝手に不機嫌になってこいつにあたったりＩＳでボコボコにしたりとかは
ふりまわしてる内には入らねえのか？」

「「「・・・・・・」」」
少女達は今までの事を指摘され何も言い返せなかった。
「それに貴方もよ、織斑千冬」
「何？」
「貴方は彼に期待していたみたいだけど、その期待の仕方が、尋常じゃなかった。いや、期待しすぎたと言うべきかしらね」
「・・・・・」
「図星だろ。だから俺はお前たちに敵対する。この力でな！」
彼が纏っている黒いＩＳから黒い炎のような物が噴き出し始めた。
「あ、あれは」
「これが俺の憎しみの姿だ！」
辺りが黒い炎のような物で包まれた。

プロローグ（後書き）

こんにちは、ケンです。まだ別の連載作が終わってない中での、連載です。更新は遅くなります。
では、よろしくお願いします。

第一話　日常

「いくぞ！一夏！」
「ああ、来い！」
少年と少女がアリーナでＩＳ同士による模擬戦を行っていた。
ＩＳ，それはとあるマッドな天才発明家により世に出された、
最強の兵器。
ＩＳ学園、そこはＩＳ操縦者を育成する世界唯一の学園である。
ＩＳと言うものは本来、女性にしか扱えないパワードスーツ
それにより、世界は男尊女卑から、女尊男卑に近いものへと変わった。
世界共通の常識は「ＩＳは女にしか使えない」
しかし、その世界の常識を根底からぶち破った少年がいる。
その名は織斑一夏。
あの世界最強と謳われている初代ブリュンヒルデ、
織斑千冬の実の弟である。
「おぉぉぉぉぉ」
一夏が雪羅のカノンモードを撃った。
「甘いぞ！一夏！そんな物、そうやすやすと当たらんぞ！」
「分かってるよ！行くぜ箒！」
一夏と闘っている少女は篠ノ之箒。
先程紹介した、天才マッド発明家の篠ノ之束の妹である。

これは少年、織斑一夏の物語である。

「また、負けた」
「ふん、鍛錬が足らんぞ！一夏！男が女に負けてどうする！」

先程の勝負は箒が勝ったようだ。
「へえへえ。そうでございますね」
「で、では、さっき言っていた事だが・・・」
「ああ、買い物だっけ？良いぜ、付き合うよ」
「そ、そうか！そうか、うん、うん」
少女は嬉しそうに顔を緩めた。
この少女、実は一夏に恋をしているのだ。
「じゃあ、もう今日は帰ろうぜ？」
「うむ！そうだな」

食堂～
「あら、一夏さん」
「ああ、セシリアか」
「あたしもいるわよ！」
「ああ、鈴も」
今、一夏に話しかけてきたのは、
セシリア・オルコット、鳳鈴音である。
二人は代表候補生でもある。
「先程まで、訓練をしていたんですの？一夏さん」
「ああ、まあな。負けたけど」
「あんた、また負けたの？最近、勝ち星挙げてなくない？」
「うるせえ」
だが、実際そうだった。
最近は専用機を持ち始めて間もない箒に負けている。
逆に箒は代表候補生にも徐々に勝ち始めてきていた。
今、専用機持ちのランクを作るとしたら、
一夏が見事に最下位である。
「ですが、一夏さんも実力をつけてきていますわよ？」
「お世辞はいいよ、セシリア」

「お世辞なんかではありませんわ！徐々に一夏さんも強くなっていますわよ」
「だったらいいんだけどな」

一夏の部屋～
一夏はベッドで横になっていた。
「でも、実際鈴の言うとおり何だよな～最近は箒に負け続けてるし、授業でも叱られることが多くなったし、それにクラスの子と模擬戦したけど、結構危なかった場面もあったからな～」
この前の放課後のことである。
いつもの如く楯無の特訓を受けに行ったら、突然、楯無がこういったのである。
「一夏君、一度クラスの子と模擬戦してみようか？」
「へ？模擬戦ですか？」
「そう、模擬戦」
という事でクラスの子を呼んで模擬戦をしてみると、かなり危ない場面もちらほら見られたが何とか勝てた。
「はあ、はあ」
「ちょっと、一夏君。さっきのは危ない所が何個か見られたわよ？」
「はい」
「最近、いろんな事があったから特訓していないけど自主連してる？」
「・・・・・」
「その様子だとしていないみたいね」
実際、一夏は最近、放課後に自主連をせず、その日の勉強で手一杯だったりする。
「勉強も大事だけど実技も出来ないとダメよ？」

「はい」

「楯無さんはああいうけど、あれを俺にやらせるってのがおかしいだろ。
そもそも、俺は事前勉強を一切してないんだから。あの人と一緒にして欲しくねえよ」
一夏は最近の自分に焦りを感じていた。
実力が伸びない事などで精神的に疲労もたまってきているのである
「まあ、言い訳にしかすぎねえか。寝よ。明日も早いんだし」
そう言い、一夏は眠りについた。

第一話　日常（後書き）

どうも、二度目の更新です。
如何でしたか？
感想も待っています。
では、さよなら

第二話　いらつき

今、一夏はとある少女を校門で待っていた。
この前の模擬戦で負けた為に買い物に付き合うという約束をしたからである。
「遅いなあ～箒の奴」
「ま、待たせたな」
「ああ、来たか。行こうぜ？」
「う、うむ」
箒が来た事により二人は買い物へと向かった。
その二人を追う影に気付かずに。
「見た？」
「ええ、見ましたわ」
「追跡あるのみだね」
「そ・うだね」
「あれ？珍しく簪もいるじゃないの」
「うん、さっき一夏が見えたから」
「じゃあ、行きますか」
「「「了解」」」
いつもの専用機メンバーだった。

「遅いぞ、一夏！」
「無茶、言うなよ。こっちは寝不足なんだぜ？」
「何故だ？」
「昨日、テストの勉強してたんだよ。今度あるだろ？」
「そんな物は毎日、予習復習していればいけるだろう」

「そんなものってお前なあ、毎日ＩＳ動かしてんのにそんな時間あるのかよ？」
「ああ、時間配分さえ考えれば出来るぞ？」
「よくできるなそんな事」
「これぐらいは誰だって出来るぞ？一夏だってしているであろう？」
「・・・お前らと一緒にすんなよ」
「ん？何かいったか？」
「いや別に。行こうぜ？」
「うむ！」

「むう、何二人で良い雰囲気になってんのよ」
「抜け駆けは無しって箒が言ってたのに」
「これは後で一夏を鍛える直す必要があるようだな」
「ふふ、一夏さん楽しみにしているといいですわ」
この瞬間、一夏が筋肉痛で苦しむことが決定したようだ。

「ふ～最近はもう、服も秋物が多くなってきたな」
「ああ、そうだな」
二人は服屋から出てきたところであった。
「一夏、すまないが少し待っていてくれるか？トイレに行ってくる」
「へいへい、どうぞ」
「すまないな」
箒は一夏に荷物を預けトイレへと走っていった。
〜は～本当に俺は強くなってんのか？〜
一夏は最近の自分について考えた。
〜最近は箒にも負けるし、代表候補生のみんなにはまだ一回も勝て

てないし、
楯無さんには怒られるわ、千冬ねえには怒られるわ。
本当に皆を守れる力なんて俺が手に入れられるのか？」
「隣良いかしら？」
「え？はい、どうぞ」
隣に女性が座った。
「久しぶりね。織斑君？」
「えっと、失礼ですけどどっかであいましたっけ？」
「あら、もう忘れたの？ほら、前にテレシアで会わなかったかしら？」
「ああ！あの時の服の人！」
「ふふふ、そうよ」
「確かスコールさんでしたっけ？」
「正解。よく覚えてたわね」
「ええ、まあ」
「所でさっき何だか表情が優れなかったけど何か悩みでもあるの？」
「え？顔に出てましたか？」
「あら、やっぱり悩みがあったのね？」
「あ」
「ふふふ、面白い子ね」
「はははは・・・・」
「一夏・・・」
「ん？彼女さんかしら？」
「か、彼女！」
箒は思わず顔を赤くしてしまった。
「違いますよ～ただの友達ですよ」
「む！」
「痛え！何すんだよ、箒！」
「ふん、自分の胸に手を当てて考えてみろ！」
「あらあら、不機嫌さんね。また会えたら今度はお茶でもしましょ

う？」
「あ、はい」
そのまま、スコールは人ごみの中に消えていった。
「一夏、今の人は誰なんだ？」
「知り合いだよ」
「お前の周りには美人さんがよく集まるんだな」
「は？何の事だよ？」
「ふん！それよりも行くぞ、一夏」

「今日は付き合ってくれてありがとう」
「ああ、いいよ。それよりも早く帰ろうぜ？眠い」
「そればっかりだな、貴様は」
〜お前が朝早くに起こしたせいだろうが！しかも理由も聞かせずにいきなり、
足踏みやがって何さまだ〜
いらつきながらも帰っていった。

第二話　いらつき（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
書き忘れてましたがこの話は原作7巻後の話です。
一夏は原作であんなにもふりまわされてんのにいらいらとか、しないのか？という事で考えてみました。
感想も待っています。
では、さよなら

第三話　かすかな異変（前書き）

どうも、ケンです。
この作品での簪と他のメンバーとの友好関係は、名前で呼び合うくらい仲が良いです。
では、お楽しみください。

第三話　かすかな異変

現時刻、６：３０
一夏の部屋～
今、一夏は昨日の疲れからかいつもなら起きる時間を寝ていた。
昨日も、帰ってからＩＳの理論について分からないところを調べてたら、
夜も遅い時間帯に終わった。
本来なら眠い体に鞭をうち、起きなければならないのだが
幸い今日は日曜日、ゆっくり眠れるというわけである。
来客さえ来なければ・・・・・
「一夏！朝稽古だぞ！」
静かな部屋にドアを強く開けた音と凛々しい声が響いた。
「ん？まだ寝ているのか？おい、起きろ一夏！」
こうして一夏の１日は幼馴染との朝稽古から始まる。

「ＺＺＺＺＺＺ」
「起きないな、起きろ一夏！朝稽古の時間だぞ！」
「ん～うるさいな～日曜くらいゆっくり寝かせろよ～」
そう言いはぎとられた布団を再びかぶり眠りに着こうとするが、
幼馴染がそれをさせなかった。
「起きろ、一夏！不摂生はいかんぞ！
毎日の継続が、血となり骨となるのだ！」
「お前は何時代の人間だよ」
「良いから、起きろ！」
「あーもう分かったよ！起きればいいんだろ！起きれば！」
「あ、ああ」
「で？今日も剣道場か？」
「いや、今日は皆もやるという事で朝から模擬戦をする事になって

るんだ」
「こんな早くからアリーナの予約取れたか？」
アリーナを使用するには予約を取らなければいけないのである。
「いや、使用時間は１０時からだ」
「はあ？まだ時間あるのに俺を起こしたのか？」
「いや、折角だから剣道でもどうかと」
「良いよ、俺はパス。まだ寝むい」
「い、いや一夏、もう時間何だが？」
「それが？眠いから寝て何が悪い？今日は休日だぜ？」
「い、いやすまない」
「じゃ、御休み」
一夏は再び眠りについた。
〜気のせいだろうか？最近一夏がだらしなくなっているような気がする〜
疑問を持ちつつも箒は剣道場へと向かった。

三時間後、第３アリーナ〜
「遅いね一夏」
「一体嫁は何をしているんだ？」
「さあ、寝てるんじゃないの？」
「一夏に限ってそれは無いとは思う」
上から、シャル・ラウラ・簪である。
「あ、来ましたわ！」
セシリアに指をさす方向を見ると一夏が眠たそうな顔で、こちらに来ているのが見えた。
「遅いぞ！一夏、何をしていた！」
「寝てた」
「は？もう９時よ？まだ寝てたの？」
「まあな」

「昨日、何時ぐらいに寝たの？」
「確か・・・・3時はまわってたような気がする」
「3時って夜中の三時だよね？」
「ああ」
「そんな不摂生をしていては体が持ちませんわよ？」
「そうだな」
「それに今の一夏の髪の毛すごい」
一夏の髪の毛はいつもはきれいに寝癖も整えられているが、今はかなり、曲がったりはねてたりした。
「そうだな。昨日はシャワー浴びてそのまんまで寝たからな」
「でも、髪ぐらいは整えようよ。人は外見で判断するよ？」
「・・・俺の勝手だろうが」
「何か言った？一夏」
「いや、何も」
「そう、じゃあ始めようか？」
「だな」
「ですわね」
「うん」
「そうね」
「分かった」
〜いちいち指図してんじゃねえよ。お前らは俺の何なんだよ。俺の勝手だろうが
それに時間をよく見ろ！まだ9：30だぞ。それで遅いって、お前達が早くに来て待っていただけだろうが〜
一夏は心の中でいらつきながらも模擬戦のため、準備運動を始めた。

第三話　かすかな異変（後書き）

如何でしたか？
テスト二日目が終わりました。
残り6教科ぐらいあったと思います。
改変物語の細かな修正も着々と進んでおります。
話が矛盾したりつながらない場合はそこまで
修正が完了しているという事ですのでご承知ください。
では、またお会いしましょう。

第四話　ＶＳ鈴

「誰から行く？」
「ここはくじで決めないか？」
「でも、前の抜け駆けが・・・」
「それもそうだが、まだ一夏はそこまで実力がある訳ではない。怪我でもされたら困る」
「まあ、それもそうね」
「ですわね」
本人達は聞こえていないと思っているだろうが一夏には聞こえていた。
〜そうだよな。まだ俺はあいつらに勝てるほど強くない。分かってたつもりだけど直接あいつらから聞くと辛いな〜
「行くわよ〜じゃんけん！ポン！」

「やった〜あたしが１番よ〜」
「ぅぅ、あの時チョキさえ出していなければ」
「３番目・・・」
「私は４番目か」
「僕は２番目」
「私が５番目か」
順番はこうである。
１、鈴
２、シャル
３、簪
４、箒

5、ラウラ
6、セシリア
「じゃあ、始めるわよ！一夏」
「待て、まだ準備が・・・」
「問答無用よ！」
そう言い鈴は早々と展開した。
「へいへい」
一夏も嫌々ながら展開した。

「始めるわよ」
「ああ」
二人の戦いが始まった。
「先手必勝よ！」
甲龍の肩がスライドし龍砲が放たれた。
〜くそ！〜
一夏も雪片二型で応戦しようとするが砲身も砲弾も見えないうえいつ、どのタイミングで来るのかが把握しづらいので、モロに喰らってしまった。
「ぐ！」
「逃がすもんですか！」
一夏は鈴から距離を取ろうとするが鈴がそうさせなかった。
「はぁぁぁ！！」
二刀流の双天牙月で一夏を切っていった。
「くそが！武器ぐらい出させろ！」
「そんな事、試合で言えるわけないでしょうが！」
「ちっ！」
一夏は丸腰の状態で剣劇を避けていた。
「まだまだー」
「させるか！カノンモード！」
「そんな物喰らわないわよ！」

「な！」
一夏は至近距離で撃ったにもかかわらず避けられた事に驚いた。
「一夏の奴、まだ気づいていないのか？」
「どうかしたのか？」
「ああ、さっき一夏は至近距離からの雪羅の砲撃を、
避けられた事に驚いていただろう」
「ああ、それがどうかしたのか？」
「実は一夏はね癖があるんだよ」
「癖？」
「そう、一夏は雪羅のカノンを名前を叫んで使ってるでしょ？
それで、撃ってくるって分かるんだ」
「確かに。だがクローモードは何も言わずに使っているぞ？」
「一夏の得意武器は近距離のものばかり」
簪が静かに語り始めた。
「クローモードは近距離武器だから名前を言わずに使える。
だけど、シールドモード、カノンモードの二つ、
カノンはともかく、シールドは恐らく一夏の中では遠距離武器だと、
無意識のうちに判断しちゃってるの」
「そう言う事。ＩＳの戦いは一瞬の判断が勝敗を分ける時だってある。
だから一夏みたいに名前をいっちゃうとどんなものか、
予想は着くから一瞬で対策が打てる」
「だ、だが敢えて言っておいて別の武器を出すことも可能なのではないのか？」
「確かにその様な事も可能ですわ。ですがそれには最低でも一つの操作で、
複数の操作を、つまり並列思考が出来なければ無理ですわ。
人間は音で判断する事もありますから」
「セシリアの言うとおり今の一夏では並列思考は出来ない。

だから、バカ正直に言った武装しか出せない。
それにあいつはただでさえエネルギー消費の多い武装しか、
持っていないにも関わらずバカスカそれを使用する。
その為にエネルギーがすぐに尽きて負ける」

「ぐっ！」
白式のエネルギーは既に尽きかけており雪羅はおろか、
零落白夜、瞬時加速（イグニッションブースト）すら使えない。
苦労して出した雪片弐型もただの物理武器となってしまった。
「さあ、これでフィニッシュよ！」
鈴が双天牙月を二つに分解し、同時に投げた。
一夏はそれを避けようとするが一方に意識が集中しすぎてしまい、
もう一方の攻撃を喰らい残りも喰らってしまった。
「隙あり！」
「しまっ！」
そのまま、一夏は龍砲を喰らいエネルギーが尽きた。
「ふ～勝った。あんたもまだまだねえ」
「・・・・」
「じゃあ、今日のご飯は奢ってね？」
「はあ？何言ってんだ？そんなこと聞いてねえぞ！」
「え？そうだっけ？ごめんごめん。実はね負けた人は、
勝った人に奢らなきゃいけないっていうルールなの」
「ふざけんな！聞いてない事を出来るか！」
「でも、負けたじゃないの、あんた」
「ぐっ！」
「じゃあ、よろしくね。あんたが勝てば良いのよ」
鈴は嬉しそうにスキップしながら観客席へと戻っていった。
～ふざけてんじゃねえぞ！何で賭けありの特訓に参加しなきゃいけないんだ！

俺が負けるのは決定だろうが！わざとしてんのかよ！』
一夏はいらつきながらもエネルギーを補給しに行った。

まだ、誰も気づいていない少年の中の黒い感情。
それは少年すら気づいていない物。
それに気づいたとき少年は生まれ変わり、
少女達は後悔する。
『ああ、何で気付かなかったんだろう』

第四話　ＶＳ鈴（後書き）

こんばんわ～
定期考査で忙しいケンでございます。
活動報告に書きましたが２０日までは改変の方は、
更新致しません。別作品はこの期間に更新を、
改変の方は、細部の修正を行います。
よろしくお願いします。

第五話　ＶＳシャル、そして女子の話（前書き）

おはようございます。
今日は学校も休業日で休みですので二つ、
更新したいと思います。

注意：ここでのエネルギー補給というのは手早く終わらせられる
作業ととらえて下さい。

第五話　ＶＳシャル、そして女子の話

休憩も終わり次はシャルとの対戦だった。
「よろしくね一夏」
「ふぁぁぁ～ああ、よろしく」
「もう、みっともないよ？一夏」
「あ、ああ悪い」
〔お前らがこんな朝早くから特訓何か誘うからだろが！
今日はせっかくの日曜なのに俺を過労死させる気か！〕
いらつきながらも模擬戦が始まった。

「行くよ、一夏！」
シャルはマシンガンを両手にコールし、乱射し始めた。
「くそ！」
白式の雪羅はエネルギー兵器には敵なしだが、
生憎、実弾兵器には全く耐性が無いため防ぐ手立てがない。
それにより避けるしかないのだがいかんせん、
一夏はまだ、技術が未熟なため一発ならまだしも、
この様に何発も撃たれると全く避けれずに当たってしまうのである。
「まだまだだよ」
「くそが！」
一夏は雪片弐型をコールするがシャルは中距離武器をコールし、
それを防ぎまた距離を取りマシンガンを連射。
この繰り返し。
「くそ！一気に薙ぎ払う！カノン！」
「当たらないよ！」
しかし、シャルは一夏の癖を熟知しているため、
事前にパイルパンカーをコール、避けると同時に一夏に接近し
パイルパンカーを一発撃ちこむ。

「くそ！」
一夏も雪片を当てようと振るうが、すぐさま離脱し当たらない、
距離まで下がりスナイパーライフルを放った。
「く！」
思わず下がろうとするがシャルはそれを許さず、再び近づき
近距離からのスナイパーライフルを、
弾切れを起こすまで、撃ち切った。
「間合いは外させないよ？このまま、終わらせる」
「この距離なら外さねえ！カノン！」
雪羅のカノンがシャルを直撃した。
「よし！」
しかし、爆煙が晴れるとそこにシャルはいなかった。
「な、どこ行った！」
「一夏？一瞬でも意識が外れるのは駄目だよ？」
「しまっ！」
そのまま、シャルのパイルパンカーを喰らい白式のエネルギーは尽
きた。

「ふ～お疲れ様。一夏」
「ああ」
「じゃあ、今日のお昼よろしくね？」
シャルは嬉しそうに顔を緩めながら観客席へと戻っていった。
{今日は日曜だから出かけようと思ったのに！あいつらの所為で、
全部の予定がおじゃんじゃねえか！}
そう思いつつ一夏は休憩込みでエネルギーを補給しに行った。

{あ～あ、めんどくさい。何でこうも連戦でしなきゃなんねえんだ
よ！}
「・・・・・でさ～」

「そうそう！」
{ん？誰か話してるのか？日曜なのに残ってるって珍しいな}
そう思いつつも通り過ぎようとした時・・・・
「でもさあ、織斑君てうざくない？」
自分の名前が聞こえ足を止めた。
「あ！それ分かる～」
「そうそう、あの少し熱血っていう所がむさ苦しいというか」
「そうそう！でね、この前の考査あったでしょ？」
「うん、あったけどどうかしたの？」
「前の考査はあたし、家の事情で全く勉強出来なかったって言ったでしょ？」
「ああ、確かに」
「で、今回は最下位かなって思ったら私よりも下の人がいたのよ！」
「え、もしかして」
「織斑君？」
「そうなの！織斑君てさ放課後も残って勉強してたでしょ？」
「それで、何も勉強してない人に負けたの？」
「そうなの。それでねこの前聞いてみたの。どんな勉強方法してるのって」
「ふんふん」
「そしたら、自分で問題作ってそれを必死にしてたんだって！」
「え～そんなのテストで出るはずないじゃん！」
「しかもさ、織斑君よく参考書とかしてるのに最下位って時間の無駄～」
「ははははは！確かに不効率でさらに能率も悪い勉強方法とか初めて聞いたよ！」
「「「「ははははははははは！！！」」」」
そのまま女子たちは満足したのかどこかに行ってしまった。
{何で？この前聞いたときは良い勉強方法だね！って言ったのに嘘だったのかよ}

一夏はそのまま、床にしゃがみこんでしまった。
〝くそ！何で俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだよ！〟
そう思いつつもアリーナへと戻っていった。

徐々に積もる黒い感情。
これがこの先どうなるのかは、
これからのお楽しみ。

第五話　VSシャル、そして女子の話（後書き）

話の中で女子の話のシーンがありましたが、
そこは整備室を出て、アリーナに行く途中のシーンとしてとらえて下さい。
それではさよなら～

第六話　VS簪　そして僅かな察知

一夏は重い表情でアリーナに戻ってきた。
しかし、その事に誰も気づいてはいなかった。
一人を除いて・・・・
{どうしたんだろう？一夏、さっきよりも元気がないというか・・・・}
簪だけがメンバーの中で唯一若干気が付いていた。
「もう、始めても良いかな？一夏・・・」
「ああ、始めようか」
そう言い簪は打鉄弐式を展開するが一夏はまだだった。
「一夏？」
「いや、なんでもない。白式！」
いつもなら一夏の呼びかけに瞬時に反応する白式だが、
この展開では若干遅く感じた。
{気のせいか？今、白式の展開が遅かったような？}
疑問を感じつつも模擬戦を始めた。

「どうだった。シャルロット？」
「うん、やっぱりラウラの言う通りだね」
「何がですの？」
「ああ、一夏はね効率よく戦闘を運ぼうとしていないんだよ」
「効率よく？どういう意味だ？」
「先程の戦いのパターンで言うと一夏は戦いの序盤は有利に運んでいるが、
最後は決まってエネルギー切れを起こし負けてしまう」
「つまり、一夏はエネルギーを考えずに最初からエネルギーを、

消費しすぎて、負けているというのか？」
「ああ、まだあいつがそれに気づいているならばまだ修正の余地はある。
だが、あいつはその事に全く気が付いていない」
「ならば教えれば・・・・」
「だめよ」
「え？」
「そうしたらあいつは私たちからの情報でしか自分の間違いを見つけられなくなる」
「そう、自分で気付かない限りこれ以上強くはならない」
「そ、そうか」

〜くそ、やっぱり簪とは完全に相性最悪だ〜
一夏は弾丸の嵐に完全に囚われていた。
距離を取ろうにも簪は近距離も遠距離も扱うため、
間合いは関係なかった。
〜もうすぐ。もうすぐで山嵐の準備が終わる〜
簪は得意の並列思考により闘いながら大気の状態、
システムの状態を確認していた。
〜もうエネルギーも雪羅、零落白夜も一発分しか残っていない。
どっちを使うべきなんだ！〜
一夏は弾丸を避けながら考えていたが、
すぐ後ろに壁が迫っている事に、気づいていなかった。
〜もう少し、もう少しで一夏は壁に当たる〜
彼女の読み通り一夏は壁に背中からぶつかり動きを止めた。
「しまっ！」
「終わる。山嵐！」
そのまま何発ものミサイルが放たれ、そのほとんどが一夏にあたり

爆発を起こした。

「ぐぅ！」

「だ、大丈夫？一夏」

「ああ、まあな」

簪が心配げに覗いた。

〜よく見ると簪って可愛いよな〜

簪の顔を見ていて思わずほんのりと顔を赤くしてしまった。

「一夏？」

「いや何でもない」

「全く情けないぞ一夏！」

皆がこちらに来ていた。

「そうよ！何で後ろに壁がある事ぐらい気付かなかったのよ」

「そうだぞ、一夏。男である貴様が女である私たちに負けてどうする！」

「・・・うるせえな」

「なんか言った？一夏」

「いや、何でもねえ」

そう言い一夏は次の模擬戦に備えるために整備室へといった。

「ふ〜ん、変な一夏。ねえ、簪」

「・・・・・」

「簪？」

「い、いや何でもない」

「そう」

〜さっき、一夏『うるせえ』って言ってたような・・・・

いつもとは違う怒った感じで・・・・〜

〜くそが！何なんだ、あいつらは！こっちは何もしていない状態でここまで、

来れたんだぞ！あいつらは何年経験を積んでると思ってんだ！」
一夏はいらつきながらも整備室に向かった。

第六話　ＶＳ響　そして僅かな察知（後書き）

どうも～二回目の更新です。
実は最初の戦う順番で二番目と三番目を間違って、
覚えてしまい先程修正いたしました。
それよりも如何でしたか？
徐々に溜まっていく黒い感情。
こう言うストレスは定期的に出さないといけませんね。
では、さよなら～

第七話　ＶＳラウラ　そして怒る一夏

「遅いぞ！一夏、何をぐずぐずしているのだ！」
「ああ、悪い」
〜トイレだから仕方ねえだろうが！第一、男子便はここから遠いんだぞ！〜
ＩＳ学園はほとんどが女子のため、トイレもほとんどが女子便。
そのため数少ない男子便まで毎日、走っているのだ。
「まあ良い、では始めるとするか」
そう言いラウラは展開した。
「へいへい」
一夏も展開しようとするが・・・
「ん？」
「どうかしたのか？」
「い、いや何でもねえ」
〜まただ、白式の展開速度がさっきよりも遅くなってる気がする〜
「始めるぞ！」
「ああ」
模擬戦が始まった。

「ねえ、箒」
「何だ？篠」
「さっきの一夏の展開、遅くなかった？」
「そうか？いつも通りだと思うが」
「そう」
若干、感づき始めている篠だった。

「どうした、一夏！避けているばかりでは勝てんぞ！」
「分かってるよ！」
〜とは言ってもラウラは1対1では反則的に強い。ＡＩＣに捕まったら終わりだ〜
一夏はラウラのＡＩＣに警戒しすぎている為先程から、一度も攻撃はしていない。
ラウラは積極的に攻撃をしてきた。
〜そろそろ行くか？雪片！〜
「どうした、一夏！丸腰の状態で勝てるとでも思ってるのか！」
「な訳あるか！」
そう強気になるが異変が生じていた。
〜何でだ！何で、雪片弐型が出ない！異常もないのに何で！〜
実は一夏は武装が出せないでいた。
〜くそ！雪羅だけで戦うしかねえのか！〜
「カノン！」
「当たるかそんな物！」
ラウラは放たれた雪羅のカノンを避け、一気に一夏に近づいた。
「はぁぁ！」
「くそ！」
ラウラがエネルギー手刀で切りにかかるがそれをクローモードで弾いた。
「一夏、雪片弐型はどうした！」
「気にするな！」
そのまま、戦いは継続された。

「珍しいな。一夏が雪片弐型を使わないなんて」
「それも、そうですわね」
「エネルギー消費の多い雪羅を使うって何してるのあいつは？」
「さあ？」

「簪はどう思う？」
「・・・・・・」
「簪？」
「え？あ、うん。さあ？」
「ふ～ん。変な簪」
｛さっき、一夏うろたえていたような気がしたけど、気のせいかな？それに普段なら雪羅のクローモード何て、めったに使わないのに｝

「そろそろ終わりにするぞ！」
「終わってたまるか！」
一夏はラウラから距離を取り機会を窺っていた。
｛チャンスは一回、それさえ当てれば勝てる｝
「終わりだ！」
「終わるのはお前だ！」
一夏は最大の瞬時加速（イグニッションブースト）でラウラに近づき、クローモードを当てようとする。
「しまっ！」
｛良し！｝
当たると思った瞬間・・・
「な！エネルギー切れ？」
「隙ありだ！」
当たる瞬間にエネルギーが切れクローは消えてしまい、ＡＩＣに捕まってしまった。
「どうする一夏？」
「・・・・負けだよ俺の」
一夏の奢る人物が増えた。

「情けないぞ！もう少しエネルギーにも気を配らなければいかんぞ！

私の嫁であろうが！」
〜嫁、嫁っていつからお前は俺の嫁になったんだ？そっちがこっちの、
意見も聞かずに勝手に言ってるだけだろうが！
こっちの気にもなれ！〜
「聞いているのか！一夏！」
「ああ！聞いてるだろが！分からねえのか！」
「！！！！！」
ラウラは固まってしまった。
「ちっ！」
「お、おいどこに行く！」
「整備室だよ！」
そのまま、行ってしまった。

「何故嫁はキレたのだ？」
「さあ？」
「あらかた負け続きでイラついているだけだろう。気にする事はない」
「そうですわね」
「だね。気にすることは無いよ、ラウラ」
「そうだな」

恋は盲目と言うが間違った方向に行くと、
最悪の事態も起こることもある。
まだ、この少女達は気づいてはいなかった。

第七話　ＶＳラウラ　そして怒る一夏（後書き）

こんにちは～ケンです。
如何でしたか？
では、また今度～

第八話　ＶＳ箒　そして浮き彫りになる異変

一夏は整備室でエネルギーを補給していた。
「くそが！何さまのつもりだ！あいつらは！」
今までの事にキレていた。
「何が男が女に負けて情けないだ！代表候補生と一般生徒の実力の差が、
分からねえのか？それともただ単に俺を使って誇示しているだけなのか？
箒もそうだ。あいつが勝ててるのはあのチートみたいな単一使用能力（ワンオフアビリティー）のお陰だろうが！
それをあたかも自分の実力みたいに言いやがって！」

補給も終わりアリーナに向かっていると千冬に出くわした。
「ちふ、じゃなくて織斑先生」
「ん？一夏か、今は職務外だ。いつも通りで構わん」
「そう」
「ああ、そうだ。一夏」
「ん、何？千冬姉」
「最近お前、あいつらに負けているそうじゃないか」
「・・・・・」
「そんなのでお前の言っている事が出来ると思うか？」
「・・・・・・」
「それに最近、授業でも失敗ばかりだな。何かあったのか？」
「別に」
「そうか。なら良い。これからも励めよ？期待してるんだからな」
そう言い千冬は一夏にしか見せない笑顔で通って行った。
いつもなら嬉しくなるのだが今ではただのプレッシャーの塊である。
「期待何かすんなよ。俺はあんたとは違うんだ」

「来たか。遅いぞ、一夏！何をぼやぼやしているのだ！」
「・・・・黙れよ」
「何か言ったか？」
「別に、始めようか」
「うむ、そうだな」
〜何が遅いだ！こっちはわざわざ遠い所まで行って戻ってきてんだぞ！
だったらお前のそのチートな絢爛舞踏で補給してくれよ！〜
一方、箒の心情は・・・
〜やった！ようやく、一夏と闘える！一夏に私の実力を見せる時だ！
そうすれば、一夏も私に頼ってくれる！うん、うん〜
恋する乙女な心情だった。
「行くぞ！」
「・・・ああ」
箒は紅椿を展開し、一夏も今回は問題もなく白式を展開と同時に、雪片弐型を展開した。
「どうかしたのか？」
「い、いや何でもない」
「なら行くぞ！」
「ああ」
〜今、念じていないのにこいつが出てきた。まるで遅れて出てくるように
気のせいか？まあいい、出たのなら何でも構わん〜
「ねえ、一夏と箒どっちが強いと思う？」
「そうだな。どちらかと言うと箒の方が上だな」

「まあね。絢爛舞踏を抜いたとしても箒の方が強いと思う」
「あたしも箒ね。セシリアは？」
「わたくしも箒さんでしょうか？箒さんは才能がおありのようですわね。
簪さんはどう思います？」
「私は・・・・一夏かな」
「え～何で？」
「何でかは分からないけどそう思う」
「だが、今の状況もそうだが箒が既に一夏を圧倒しているが？」
「だとしても、私は一夏だと思う」
「ふ～ん」

「はぁぁぁ！」
箒は二本の刀で一夏を攻撃していくが、一夏は避けてはいるがワンテンポ遅い反応だった。
〜どうなってんだ！白式の反応がいつもより鈍い！〜
「どうした、一夏！動きが遅いぞ！」
「分かってるよ！」
一夏が雪片弐型で攻撃しようとした瞬間・・・
「な！」
突然、雪片弐型が消えた。
「何をしている一夏！何故、武器を直す！」
「知るか！勝手に戻ったんだ！」
するとオープンチャンネルを通じて皆の声が聞こえてきた。
『どうした一夏！』
「勝手に武装が戻ったんだ」
『一応、整備室で確認してみようか？』
「ああ、分かった」

始まる異変。
そして、少年の運命はここから分かれていく。

第八話　ＶＳ箒　そして浮き彫りになる異変（後書き）

こんばんわ、ケンです
如何でしたか？
それでは、御休みなさい

第九話　黒い感情の具現化、そして始まる異変

誰も知らない会話～
「な、何なの！あなたは！」
「私は彼の黒い感情が具現化したもの」
「彼の黒い感情？」
「そうよ」
「こんな所に何の用？」
「別に今は何かをする訳ではないわ。
ただ貴方達は彼を全く理解していない」
「どういう意味ですか？」
「私達は貴方よりは理解していると思うけど？」
「ふふふ、まあ良いわ。私はまだ主人公ではない。傍観者よ」
「？？？」
「ねえ、知ってる？人間にはパターンがあるのよ？」
「パターン？」
「そう、どれだけ努力しても意味のない人間、
努力を知らない人間、努力を諦める人間
そして、努力をして成長する人間。彼はどれだと思う？」
「勿論、努力をして成長する人間だよ」
「私も同感です」
「ふふふ、違うんだな～」
「「え？」」
「彼はね憎しみで強くなる」

「で？どう思う？薫子ちゃん、虚ちゃん」
「う～ん、別に異常と言う異常は見当たらないね～」

「そうですね。このデータを見る限りは特に異常は見当たりません」
今、白式は整備室で整備課のトップ達に見てもらっていた。
「でも、確かに勝手に雪片弐型が消えたんです！」
「とは言われてもね～」
「武装が搭乗者の意思に反してクローズされるってのは無いんだけどな～
本当に勝手にクローズしたの？」
「ほ、本当ですよ！」
「ひとまず、簪ちゃんと本音ちゃんは残って頂戴。
後はみんな帰っていいわよ」
「お、俺も手伝いますよ！」
「良いわよ、別に。一夏君は何もわからないでしょ？」
「！！！！！」
「あ、後、代表候補生の皆にも残ってもらおうかしらね」
「良いぞ別に」
「分かりましたわ」
「はい」
「分かったわ」
「それと、箒ちゃんてお姉さんと連絡できるかしら？」
「ええまあ」
「じゃあ、連絡お願いするわ。私達だけでは分からないからね」
「分かりました」
「じゃあ、一夏君は帰っていいわよ。お疲れ様。ゆっくりしてね」
「・・・・はい」

〜やっぱり俺は皆にはいらない存在なのか？いや、そんな筈はない！
この世にいらない人間はいない！それにただ、俺に知識がないだけであって、
あいつらは代表候補生で俺なんかよりもＩＳの事を知っているから、

残されたんだ。そうだ、きっとそうだ。
でも、本当にそうなのか？」
一夏は若干人間不信に陥っていた。
「は～何で俺がＩＳ何かを動かすんだよ。俺なんかよりも、
頭のいい奴が動かせばよかったのに。
ま、もっと勉強すれば良い話か。
あんなのただの被害妄想だな。よし、勉強するか！！」
己を奮い立たせ一夏は部屋へと向かっていった。

「お姉ちゃん」
「ん、何かしら？簪ちゃん」
「あの言い方は無いと思うけど」
「そうかしら？一夏君に任せる事がないからああ言ったまでだけど」
「そう」
簪はそのまま画面を流れる膨大な量のデータに視線を戻した。

「ほら見なさい！一夏はどんな事があってもくじけないんだよ」
「そうです」
「ふふふ、今はただそういう風に見えるだけ。
もうじき彼も気づき始めるわ。
彼女たちに抱いているこの黒い感情にね」

第九話　黒い感情の具現化、そして始まる異変（後書き）

こんにちは～ケンです。
如何でしたか？
少し楯無の発言がきついとは思いますがご承知ください。
ちなみにこの話で言うと作者は、
下から見たら最高、上から見たら最弱です
では、さよなら～

第十話　その胸に抱く感情

考査も無事に終わり、白式も異常はないとのことで帰って来た。
今日は考査の返却日だった。
「では、テストを返す。名前の順で来い」
よろこぶ者、落ち込む者など様々だった。
〜あれだけ勉強したんだ。結構いい線は行った筈〜
「織斑」
「はい」
「もっと精進しろよ？」
「は？」
答案用紙に書いてあったのは全て４０という数字だった。
「な！」
「この学年で平均が４０台なのはお前だけだぞ」
つまりは最下位と言う事になる。
休み時間になるといつもの皆がやってきた。
「どうした、情けないぞ！一夏！」
「そうだぞ！私の嫁だろうが！」
「にしてもひどい点数ねえ。どんな勉強したのよ」
「皆はどうだったんだよ」
全員が４０という点数は無く、どれも８０以上。
最低でも７０はある。
「簡単だったでしょう。今回の問題くらい」
「そうだね。前に比べると易しかったかな」
〜お前らと一緒にすんなよ。俺はお前らとは違う！〜
「ねえ、一夏。この後皆で模擬戦でもどうかな？」
「結構だ」
「え？」
「どうせ負けるのにする意味ないだろ？」

「で、でも一夏だっていい線行ってるよ？」
「そ、そうですわ」
「思ってもない事を言うなよ。見苦しいぞ。
とにかくこれから俺は模擬戦はしない」
そのまま一夏は帰ってしまった。
「何かあったんでしょうか？」
「さあ」

「くそ！」
一夏は部屋に着くなり答案用紙を投げ捨てた。
「何で！何で、あんなにしたのにこんな点数何だ！
勉強方法だって変えた。何冊も参考書を解いたのに何で！」
それから一夏はベッドで横になっていた。
〜努力は人を裏切らないって言うけどそんな訳ないか。
才能はある奴は裏切らないってことかよ〜
「あ〜もう！気分転換に散歩に行こう。
あいつらに見つからないように。
見つかったらまた付いてこられる」
一夏は着替え外出の許可をもらいそこら辺を散歩し、
公園のベンチに座っていた。

〜やっぱり俺は才能がないのか？そういえば昔から努力しても、
何もしてない奴に負けてばっかだったけ？
剣道だってそうだった。毎日、遅くまで竹刀を振った。
お陰で筋肉痛になってまともに動けない日もあったな。
それで、箒と試合すると一本負け。
そういえば、努力が足らんぞ！って言われたっけ？〜
「ははっ！俺は何をしても無駄だな。

時間が無駄って言われても仕方ねえか」
一夏は今までの事を思い出し自虐の思いで笑っていた。
「隣良いかしら？」
「ええ、どうぞ」
〜そう言えばこんな事、前にもあったような？〜
そう思いとなりをふと見ると・・・
「スコールさん！」
「ふふふ、久しぶりね？織斑君」
「久しぶりつってもこの前に会いましたよね？」
「それもそうね」
それから少し一夏はスコールと話していた。
「ねえ、悩みでもあるのかしら？」
「え？」
「いや、さっき難しい顔をしてたから」
「別にそんなに深い悩みじゃありませんよ」
「まあ、そう言わずにお姉さんに言ってみなさい」
「・・・実は最近焦ってるんです」
「焦ってる？何に？」
「自分の成長にです」
「そう言えばＩＳを動かせたっけ」
「ええ、それで俺は皆を護りたいのにどれだけ特訓しても強くなった気が、
しないんです。代表候補生の皆には勝ったことないし、専用機持ちじゃない人とかに、
負けかけたりとか」
「そう。それで貴方はどう思ってるの？」
「え？」
「彼女たちにどんな感情を抱いているの？」
「俺は・・・・・」
「ふふふ、まあゆっくり考えなさい。

もし、気付いたらここに電話して頂戴」
渡された紙には電話番号が書いてあった。
「これは？」
「気付いてからのお楽しみよ。もし気づかないんだったら、そのまま焼却して頂戴。良いわね？」
「はい」
「ふふ、良い子は好きよ。じゃあね、織斑君」
そう言い残しスコールは人ごみに消えていった。
「俺があいつらに抱いている感情・・・・」
渡されたメモ用紙をポケットに入れ、一夏は再び歩き出した。

「あ、もしもし？私よ」
『どうかしたのか？』
「ふふふ、良い人材が見つかったわ」
『人材？こっちにか？』
「そうよ。まだ気づいていないけど気付いたら、きっと彼はこっちに来るわよ。力を求めて」
『悪いが言ってる事がよく理解できないんだが』
「まあ、それもそうね。まあ楽しみに待ちましょ。もうそっちに帰るから迎えをよこして頂戴。オータム」
『分かった』
そう言いオータムと呼ばれた女性は電話を切った。

もしも、一夏がこの日散歩などに行かず皆と模擬戦をしていたらこの女性とも会わなかった。
そしてあんな事にもならずに済んだであろう。
少年の心にあるものは何なのか？
それは少年が気づくべきではないものなのかもしれない。

第十話　その胸に抱く感情（後書き）

こんにちわ～ケンです。
ようやくテストも残り一日です。
でもその後に校外学習が・・・・
めんどくさいです。
それはさておき如何でしたか？
感想もお待ちしております。
では、さよなら～

第十一話　裏切り

一夏はベッドで横になりながらスコールに言われたことを考えていた。
〜俺があいつらに抱いてる感情？別にあいつらは唯の友達だし、これといって仲が悪いという事でもない。
まあ、たまにうざいとは感じるけどそれ以外は特に〜
ちなみに現時刻は６：３０。
昨日は早くに寝た為こんな時間に目が覚めてしまったわけである。
「一夏、朝稽古に行くぞ！」
静かだった部屋に凛々しい声が響いた。
〜またかよ。そんなにお前は俺に強さを見せつけたいのかよ〜
「今日は起きているな。では、行くぞ！」
〜行くこと前提かよ。は〜うぜえ〜
そそくさと服を着替えているとある事に気付いた。
〜あれ？俺さっきあいつにうざいって思ったよな。
いらいらもしてるし。ま、いっか〜
そのまま剣道場へと歩いていった。

「面！」
「うぇ！」
「だらしないぞ！一夏！前から思っていたが最近、不摂生なのではないか？」
「は？」
「目の下にくまも出来てるし、この前のテストも遊び呆けていたのではないのか？」
〜お前に何が分かるんだよ。俺は人より何倍もしなきゃ出来ないんだよ！
何でもできるお前と一緒にするな！〜

「聞いているのか、一夏！」
「ああ、聞いているよ」
「それに剣道の腕も鈍っているのではないか。それでは、いつまで経っても、あの頃のように勝てんぞ！」
〜あの頃・・・・めんど〜
一夏は防具を脱ぎ更衣室へと歩いていった。
「おい、一夏！どこに行く！」
「帰るんだよ。やってても意味ないだろ？」
「どういう意味だ」
「運動ってのは才能がある奴がするもんなんだよ。俺みたいに才能がない奴は、
やってもやらなくても同じ。時間の無駄」
「お前は努力の何を知っている。努力は人を裏切らない！」
「それは才能がある奴だけに言える事だ。それに努力なんてもんは無駄なだけだよ」
「そんな事はない！」
「そうなの。俺は体験したから言えるの」
「だ、だが」
「だがもへったくれもないの。じゃあな
もう俺を誘わなくても良いぞ。遅れるなよ〜」
「い、一夏・・・・」

〜あ〜いらつく。朝からいらつくとか最悪だ。
あいつは経験した事がないからそう言えんだよ〜
廊下を歩いていると何人かの女子生徒の声が聞こえてきた。
〜朝っぱらからうっせえな。教室でしゃべれよ、教室で〜
そのままいらつきながら教室へと向かっていった。

「あ、おはよう一夏！」

「おはよう」
「凄い寝癖だよ？直してこなかったの？」
「良いだろ？別に俺は気にしない」
「一夏が気にしなくても周りは気にするよ。ほらまだ時間もあるから直してきなよ」
「めんどくさいからいい」
そのまま一夏は座ると机につっぷし眠りに入った。

つぎに目が覚めたのは頭に鈍痛が走った。
「痛！」
「馬鹿もの！いつまで寝ている、授業を始めるぞ。号令だ」
「はいはい。起立、礼、着席～」

休憩時間になりトイレに向かっていると
女子たちの喋り声が聞こえてきた。
～いらつく。教室でしゃべれよ～
そのまま通り過ぎようとしたが自分の名前が聞こえ足を止めた。
「ねえ、織斑君てさずるくない？」
「あ、分かる～男だからって専用機渡されてさ～」
「そうそう。それに噂によると織斑君、ＩＳ使えなくなったらしいよ」
「え！本当？」
「ほんと、ほんと」
彼女たちの言うとおり一夏は授業中に展開しようとしたが
白式が起動できなくなっていた。
しかし、訓練機は使えたので追い出されはしなかった。

「はは！じゃあ、織斑君がここにいる意味ないじゃん！」

「ほんと、ほんと。それにシスコンだから嫌いなんだよね～」
「あ、分かる～」
「「「ははははははははは」」」
そのまま女子生徒達は教室に戻っていった。
一夏は教室とは逆方向に向かっていた。

「くそ！何なんだよ、あいつらは！
人の気も知らないで！俺だってな専用機何か欲しくもないんだよ！
それなのにデータが欲しいからって与えられて。
いらないんだよ！」
一夏は授業をさぼり自室にいた。
｛憎い、憎い、憎い、憎い！
あいつらが憎い！殺したいほど憎い！
俺を物みたいにふりまわすあいつらが憎い！｝
一夏はふとスコールの話を思い出した。
『貴方が彼女たちに抱いてる感情に気付いたらここに電話してきなさい』
一夏は机に置いてあった紙を取った。
「そうか、分かった。俺があいつらに抱いている感情が。
俺はあいつらが憎い！殺したいほど！」
一夏は迷わずにその番号に電話をかけた。
「もしもし」
「はい。織斑一夏様ですね？要件は承っております。
スコール様につなぎますので、少々お待ち下さい」
数分するとスコールが出た。
「あら、織斑君。これに電話したって事は気づいたのね？」
「ああ、気づいた。俺はあいつらが憎い！殺したいほどな！」
「ふふふ、それで良いわ。これから言う場所に行きなさい。
迎えをよこしてあるから。誰にもばれずにね」

一夏は着替え言われた場所に行くと黒塗りの外車があった。
そこには老人が一人立っていた。
「織斑様ですね？」
「ああ」
「お待ちしておりました。お乗りください」
車に乗り1時間ぐらい走りある場所で下ろされた。
「スコール」
「は～い。待ってたわよ」
「何でこんな所に」
「私は亡国機業（ファントムタスク）なの」
「あっそ。それで？」
「驚かないのね。いいわ織斑君、亡国機業（ファントムタスク）に入りなさい
そうすれば力が手に入るわ。どうする？」
「そんな事を聞くなよ」
「ふふふ、ようこそ！亡国機業（ファントムタスク）へ歓迎するわ織斑君」
一夏はスコールの手を取った。

少年の運命が動き出した

第十一話　裏切り（後書き）

こんにちわ、ケンです。
ようやくテストが終わりました。
如何でしたか？
一夏がとうとう亡国機業に入りました。
では、さよなら～

第十二話　変わっていく日常

今、一夏はスコールに連れられ建物内部にいた。
「ここは何なんだ」
「ここは亡国機業（ファントムタスク）の内部よ」
「だが、表には株式会社と書いてあったが」
「それは表向きよ。表で金を稼いでその金を裏で使うのよ」
「そう言う意味か」
「ええ、まあね。ここに入るわよ」
スコールがドアを開けるとそこには一人の女性が機械をいじりながら聞いてきた。
「遅かったなスコール。人材とやらは連れて来たのか？」
「ええ、連れて来たわ。ひとまず見て頂戴」
「ああ、わか・・・お前、何でここに！！」
「オータムだったか？」
「呼び捨てしてんじゃねえよ！くそ餓鬼！」
「まあまあ、二人とも落ち着きなさい」
「お前の言っていた人材ってのはこいつの事か！」
「ええ、そうよ。期待の新人さんの織斑一夏君」
「何でこんな奴を」
「彼はねＩＳ学園に恨みがあるのよ」
「信じれるか！」
「ん～頑固ね。まあ良いわ、ひとまず織斑君は今日のところは帰りなさい」
「ああ、分かった」
「また後日、連絡するからその時は今日来た所に来て頂戴。迎えを置いておくから」
「分かった」
そのまま一夏は帰って行った。

「スコール！何であんな奴を裏側（こっち）に入れんだ！あいつは表側（あっち）の人間だぞ！」
「それは過去の話よ。分からなかった？彼のＩＳ学園って聞いた時の雰囲気、今までとは違ってたでしょ」
「そ、それはそうだが」
「まあ、そのうち信じられるようになるわよ」

一夏はその後ＩＳ学園に戻り、授業をさぼって怒られた事以外には何も
無かった。いつものメンバーに聞かれたりもしたが適当にあしらっていた。
そして何事もなく夜を迎え眠った。
「ここはどこだ？」
一夏は今、自分の知らない場所にいた。
辺りには何もない。
「ここは貴方の心の中のようなもの」
「誰だ、お前は！」
「んもう！そんなに殺気立たなくてもいいじゃない。私は貴方なのに」
「何？」
「違うわね。貴方の闇って言うべきかしら」
「俺の闇？」
「そう、貴方が彼女たちに抱き続けた負の感情が集まり私が出来たの」
「負の感情」
「そう。貴方が織斑千冬や専用機持ちのメンバーに抱き続けているものよ」
「そうか。で？何の用だ」
「ふふ、貴方に質問があるの」

「質問？」
「そう質問。貴方はどんな力が欲しい？」
「どんな力・・・・」
「そう」
「俺はあいつらをぶちのめす力が欲しい！
全てを燃やしつくす炎のように何ものにも消されないような力が！」
「ふふ、合格よ。また会いましょ？」
「お、おい待てよ！」
そのまま消え去ってしまった。
「ん？」
次に目を覚ますと朝日が眩しかった。
つまり今は朝という事になる。
「ふぁぁぁぁ～今何時だ～？7時ちょうどか」
そのまま一夏は服を着替え食堂で朝食を食べて教室へと向かった。
「あ、おはよう一夏！」
「ああ、おはよ」
〈朝っぱらからテンション高過ぎ。頭に響く〉
「ねえ、一夏」
「ん？」
「今日の放課後に模擬戦しない？」
「は～忘れたか？俺はもう専用機持ちじゃない」
「覚えてるよ。でも訓練機を使っても模擬戦は出来るでしょ？」
〈あ～つまりこいつは自分が一番訓練機のラファールを使えるから教えてあげるって事か〉
「いやいい」
「あ、もしかして会長さんとの放課後特訓があったっけ？」
〈そう言えばそんなのあったな。最近行っていないけど。これを使わせてもらうか〉
「ああ、あったな」
「そっか、ごめんね」

「別に。で、要件はそんだけ？」
「う、うん」
「あっそ。んじゃ」
そのまま一夏は教室へと向かっていった。
〜〜最近、一夏の態度がよそよそしく感じるのは気のせいかな？〜〜
〜〜そう言えば最近、生徒会も行ってねえな。忘れてた〜〜

放課後〜
「こら、一夏君！遅刻よ」
「すいません」
「じゃあ、今日は」
「楯無さん」
「何かしら？」
「俺が専用機持ちじゃないって知ってますよね？」
「ええ、まあ」
「じゃあ何でまだやるんですか？」
「それは訓練機を使えば」
「訓練機は予約も大変です。ですので今日で終わりにしましょう」
「え？」
「楯無さんも生徒会で大変なのに訓練機でするのは不可能です。ですので特訓はもう結構です」
「い、いやでも」
「楯無さんも俺を鍛えるより箒を鍛えた方が楽しいでしょ？」
「・・・・・」
「図星ですね。俺を教えてるときあくびとかしてましたもんね」
「あ、あれはつい」
「でも箒の時はそんなの一度もありませんでしたよね？」
「・・・・・」
「て言う事でもう結構です。今までありがとうございました」
そう言い一夏は帰って行った。

「一夏君・・・・」

アリーナには楯無のつぶやきがひどく聞こえた。

第十二話　変わっていく日常（後書き）

どうも～ケンです。
如何でしたか？
原作の一夏ってあんなに振り回されてんのによくキレないなとつくづく思います。
では、さよなら～

第十三話　死ねない訳

放課後の特訓をやめてから数日が経った。
あれから楯無が何度か一夏のところに説得に来たが
楯無も諦めてもう来なくなった。
「は～」
「どうかなさいましたか？会長」
「虚ちゃん」
生徒会室で虚と楯無が二人で駄弁っていた。
「そういえば最近、織斑君来ませんね。何かあったんでしょうか？」
「一夏君は・・・・辞めたわ」
「え？本当ですか！」
「ええ、昨日一夏君の部屋に行ったらそう言われたわ。
もう俺は生徒会にもいかないって」
「最近、彼も色々とありましたから精神的にも疲れてるのでは？」
「そうかもしれないけど・・・・」
「ここは放っておく方がいいかもしれませんね」
「そうかな～」

一方その頃、一夏はスコールに呼ばれ亡国機業（ファントムタスク）にいた。
「何か用か？スコール」
「まあね、ひとまず今日と明日を使って貴方を鍛えるわ」
「俺を？」
「ええ、そうよ」
「どうやって」
「それは・・」
「お前が私と闘うんだよ！」
上から声が聞こえた。

「オータム」
「呼び捨てすんなって言ってんだろが！」
「アラクネ直ったのか？スコール」
「まあね。まだ、戦闘は無理だけど貴方を鍛えるぐらいはできるわよ」
「で、どうすれば良い？」
「生身で戦いなさい」
「は？」
「武器はそこら辺に落ちてるのを使えばいいわ。
また３０分後に生きて会いましょう？」
「じゃあ、とっとと始めるぞ！くそ餓鬼」
「ああ」

〔さてと、貴方は本当に使えるか否か。試させてもらうわ、一夏君〕
スコールは別室のモニターで戦いの様子を観察していた。

オータムは蜘蛛のような足を使い一夏に向けて動かしたが
それを一夏は避けて足もとに転がってる銃を一丁取り発砲した。
「ぐっ！これＩＳの武器かよ！」
ＩＳの武器を生身で使うとなると普段はＩＳによって中和されている
衝撃が全てフィードバックする為かなりの激痛が走る。
「隙ありだ！」
「しまっ」
慌ててもう一度撃とうとするが遅かった。
「がはっ！」
そのままアラクネの足に吹き飛ばされ壁にぶつかった。
「ひゃはははは、どうだ！お前みたいな餓鬼が来るとこじゃないんだよ！
さっさとかえ・・！！」
オータムは言いかけた言葉を思わず止めてしまった。

目の前の一夏がまだ立っていたからだ。
そして、その一夏から強烈な殺気がとんできた。
〜な、何なんだ、あいつは！今までこんな殺気、感じたこと無いぞ！〜
それはオータムすら恐怖する程の殺気だった。
「俺が、」
「あ？」
「俺が、俺が、俺がこんな所で死んでたまるかぁぁぁぁぁぁ！！」
「！！！！！」
「俺はあいつらを潰すまで死ぬわけにはいかない！
どんな事があっても俺は勝っていく。あいつらをぶち殺すまでわなぁぁぁ！！！」
叫びながら一夏は両手にマシンガンを持ち乱射し始めた。
勿論、ＩＳの武器を。
〜くそ！さっきまで衝撃でビビってた癖に何で今は両手で持ててるんだよ！〜
「くそ餓鬼がぁぁぁぁ！！舐めてんじゃねえぞぉぉぉぉぉ！！」
「「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」」
辺りには銃声と叫び声が響いていた。

３０分後〜
「はあ、はあ。ようやく倒れたか」
一夏は大量の血を流しながらかろうじて生きていた。
「がぁぁ。ぐぅ」
それでもなお一夏は立とうとする。
「まだ、立つ気かよ」
しかし、ダメージが大きかったのかそのまま気を失ってしまった。
「くそ」
オータムも緊張が切れそのまま座り込んでしまった。

「凄いわ」
「スコールか」
「まさか生身でＩＳをここまで追い詰め、そしてあの殺気。
ふふふ、やっぱり私の目に狂いはなかった」
「こいつを入れるのか？こっちへ」
「ええ、さっきの戦いで貴方も認めたでしょ？」
「まだ、認めてはいないがお前の目に狂いはないんだろ？
なら、こっちは何も言わないがあいつがなんて言うか」
「エムか・・・まあ彼女も認めるでしょ。
ひと先ず彼を医務室に運びましょ？」
「ああ」
そのまま一夏は医務室に運ばれ一命を取り留めた。

動き出した少年の運命
少女達はそれに気付かず日常を過ごす。
ただ一人を除いて。
やがて、この少女は大きな選択をする。

第十三話　死ねない訳（後書き）

こんばんわ～ケンです。
人が傷つくことには人はとても鈍いです。
作者も経験した事があります。
如何でしたか？
というより亡国機業に医務室とかあんのかな（笑）
あるという設定でお願いします。
それではさよなら～

第十四話　全てを燃やしつくす炎

一夏は夢の中にいた。
「また、ここか」
「は～い。お久～」
「お前」
あの時の少女が現れた。
「また会ったね。まあ、私が呼んだんだけどね」
「で？今度は何の用だ？」
「貴方に質問よ。どうして貴方は白式を使えなくなったと思う？」
「そんな事はどうでも良い。もう過去の話だ」
「あら、冷めてるはね。まあ良いわ教えてあげる。貴方の心の闇、つまり私が生まれて白式を侵食したからよ」
「そうか」
「それともう一つ質問があるの」
「何だ？」
「貴方はどんな力が欲しい？」
「力・・・・」
「そう」
「俺はあいつらをぶちのめす力が欲しい！
全てを焼き尽くす炎のような力が欲しい！
その為なら何だってしてやる！」
「ふふふ、分かったわ。また会いましょ」
「ちょっと待て！お前は誰だ！」
「私は　　よ」

「ん？ここは」
目が覚めると包帯を巻かれた状態でベッドに横たわっていた。

「ここは医務室だ」
「オータム」
「お前、ほんとに死にかけたんだぞ。医者が言うには一度心臓が止まったらしい」
「そうか。それより今何時だ」
「今は日が開けて日曜日の夜中だ」
「そうか・・・お前、1日中いてくれたのか？」
「けっ！馬鹿言うな、スコールが用事で留守だから私がしてるんだ」
「そうか」
「まだ寝てろ。明日も鍛えるんだからな」
「ああ、そうする」
再び一夏は意識を落とした。

翌日～
「あら、おはよう。二人とも」
「ああ、おはよう」
「ああ」
上からオータム、一夏である。
「元気そうね、一夏君」
「ああ、お陰さまでな」
「じゃあ、今日はＩＳを使って鍛えましょう。担当は私がするわ」
「・・・そうか」
そう言いガントレットに手を当てた。
〜展開してくれよ〜
「白し！！」
一夏が展開しようとした時、突然ガントレットから黒い炎が噴き出した。
「な、なに！？」
「何だ、それは！ガキ！」

「知るか俺が聞きたい！」
その炎は一夏の腕を一気に飲み込んだ。
「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「ちっ！オータム、すぐに消火器を！」
「あ、ああ！」
「いらねえ！」
「「！！！！」」
「で、でもそうしないと貴方が！」
「こいつが呼んでんだよ！ここで拒否したら二度と力は手に入らねえ！」
それを最後に炎が一夏の全てを包みこんだ。
「一夏君・・・」
「ガキ・・・・」
突然、炎がはじけ飛んだ。
「今度は何なの！？」
そこには黒いＩＳを纏った一夏が立っていた。
「そのＩＳは何だ、ガキ」
「こいつは俺の新しい剣の黒幻（ブラックファントム）」
「まるで悪魔みたいね」
その姿は全てが黒一色であり、さらに黒い翼まである。
「俺と闘え、スコール」
「待ちなさい。一旦そのＩＳを解析してから・・・」
「俺と闘え！」
「・・・分かったわ。後悔しないでね？」

オータムＳＩＤＥ
今二人が戦っている。
今はスコールが有利に戦ってるがあいつが何も攻撃せずに全て避けている。
あれでも亡国機業（ファントムタスク）のなかでは１，２を争う腕の持ち主だ。

そこらの代表よりも強いスコールの攻撃を全部
避けてる事態が凄いがあいつは何で何もしない。

「いつまで、避けてるつもりなのかしら！？
攻撃しないと勝てないわよ！」
「・・・そうだな。ようやくこいつの
全てを理解したから仕掛けるか」
そう言い一夏は黒炎で刀を形成しスコールに切りかかるが
スコールはそれを剣で防いだ。
「どうしたの？こんなもの？」
「そう焦るな」
その瞬間、炎が剣を伝ってスコールのＩＳに燃え移った。
「な、何なの！？この炎。消えないじゃない！」
「そいつは黒幻の単一仕様能力（グラックファントムオブアビリティー）の
操炎者（そうえんしゃ）により生まれたエネルギーを喰らう炎」
「エネルギーを喰らう炎？」
「そうだ。そいつがＩＳに着火すればエネルギーを喰らいつくすまで、
消える事はなく喰らえば喰らうほど勢いは強くなる。
単純に炎としても扱える」
説明通り炎は喰らい続けスコールの
ＩＳのエネルギーはさらに減少スピードが跳ね上がった。
「・・・・負けたわ」
スコールが負けを認めたと同時に一夏は炎を消した。

「凄いわね、そのＩＳ」
「まあな、でも欠点もある」
「欠点だと？」
先程まで避難していたオータムも話に加わった。

「ああ、黒幻（こいつ）はこれしか武装がない」
「つまり逆に言えば武装を追加できないの？」
「ああ、使うならできるが拡張領域（パルスロット）が無いから
使い捨てないといけない」
「それで能力が他を圧倒してるのね」
「まあな」
「だが、これからどうすんだ？」
「何がだ？」
「お前はＩＳ学園に在学してるから授業で
展開しないと怪しまれるぞ」
「ああ、その件は大丈夫だ」
「どうして？」
「こいつの構造は白式と同じだ。それに俺は白式を
展開できなくなってるから怪しまれることはない」
「ちょ、ちょっと待て！」
「何だ？」
オータムが声を荒げた。
「だったらお前は昨日の特訓で絶対防御無しで戦ったってのか！」
「ああ、まあな」
「は～そう言う事は早めに言いなさい。特訓も内容を変えたのに」
「そうだな」
「ま、ひとまずは力も手に入れた事だしオータムは良いわね？」
「ああ、文句はない」
「？？？」
「織斑一夏君！」
「なんだ？」
「改めて歓迎するわ、ようこそ亡国機業（ファントムタスク）へ！」
「ああ！」
一夏はスコールの手を取り握手をかわした。

この日、この世界からある物が消失しあるものが出現した。
それは誰も気づかない事。
ここから少年の復讐劇は始まる。
美しかった白は消失し、全てを闇に染め全てを燃やしつくす黒が現れた。
白の消失、黒の出現。

第十四話　全てを燃やしつくす炎（後書き）

こんにちわ～
如何でしたか？
ようやくオリＩＳを出せました～
設定も近く出します。
それではさよなら～

第十五話　少年の諦めと少女の涙

あれから一夏はメディカルチェックを終えてＩＳ学園に帰ろうとしていた。
「ちょっと待ちなさい。一夏君」
「何だ、スコール？」
「貴方にはこれから任務を言い渡すわ」
「任務？まさかＩＳ学園の内部データでも流せとか？」
「あら、感が良いわね。正解よ」
「それだけ？」
「後、月一で良いからこっちに顔を出して頂戴。その時に任務があれば言うわ」
「分かった」
そのまま一夏は車に乗り帰って行った。

「お疲れ様でした。織斑様」
「ああ、貴方もありがとう」
一夏は学園の帰路の途中でいつものメンバーと遭遇した。
〜げ！何であいつらがここにいるんだ！〜
一夏は見つからない内にその場から離れようとするが・・・
「あ！一夏！！」
「は〜最悪」
案の定見つかった。
「こんな所にいたか。どこにいたんだ、昨日は！」
「俺の勝手だろ」
「嫁は夫と共にいると聞いたぞ！」
〜誰だよ、こいつに間違った日本のオタク文化を入れた奴〜
「でも、本当にどうしたの一夏？」
シャルが心配そうに聞いた。

「は～昨日は宿泊届を出したんだけど」
「何よ～言ってくれればいいじゃないの！」
「そうだぞ、一夏！」
「そうですわ、一夏さん！」
上から鈴、箒、セシリアである。
〔何でお前らに俺の予定を言わなきゃならん。お前達は俺の何なんだ？〕
「放っておけよ。俺の勝手だろ」
「まあいい。ひとまず学園に戻るぞ」
ラウラが一夏の手を持って引きずり始めた。
「馬鹿言うな。俺はまだ用事があるんだよ」
用事と言っても家の掃除だが・・・
「異論は認めんぞ！お前には聞きたいことが山ほどあるからな」
そのままいつものメンバーに学校まで引きずられてしまった。

一夏の部屋～
「で、何か用？」
部屋にはいつものメンバーと楯無となぜか千冬がいた。
「何かじゃないわよ！あんた最近おかしいわよ」
「そうだぞ一夏」
幼馴染の二人が声を荒げた。
「別に何も変わってないけど？」
「変わったよ！急に僕たちとは模擬戦はしなくなるし
会長さんとの特訓も辞めちゃうし
生徒会も辞めちゃったし、何かあったの一夏？」
シャルが心配そうに見つめた。
「別に何もない。ただ強いて言うなら気づいただけかな？」
「何に気付いたのかしら？」
楯無が質問した。

「俺さあ前まで皆を護るとか言ってたけど正直頭がどうかしてた」
「どういう意味だ?」
「そのまんまですよ織斑先生。自分の命は自分で護るのが普通だし才能があってなおかつ皆みたいに強い奴が言う事ならば別に何も思わない。
でも俺みたいに才能もない力もないような奴が言っても唯のヒーローごっこしてるだけ」
「何を言ってるんだ一夏!あんなに特訓してたのに今、やめたら水の泡だぞ!」
「なあ箒、0に何をかけても0なのは分かるだろ?」
「あ、ああ」
「それと一緒だよ。俺は元々数字で言えば0。そんな俺が汗水たらして
馬鹿みたいに毎日、特訓しても時間の無駄。それに、」
「それに?」
「もう疲れた。何事にも」
一夏の目は以前のように光がともっていなかった。
「一夏君、きっと貴方は少し飛ばし過ぎたのよ。少し休んだらどう?」
「ん、何?同情ですか?会長さん」
「違うわよ、私は貴方を心配して・・」
「本当は心にも思ってないくせに?」
「「「「!!!!!!!」」」」
「お前達みたいな才能がある奴には一生分からねえよ」
「い、一夏さんにも才能はありますわよ!」
「才能がある奴は専用機手に入れて三カ月ぐらいの奴に負けるのか?」
「そ、それは」
「だろ?だから俺は何もしな〜い。しても無駄だしな」
「「「「・・・・・・・・」」」」

誰も一夏に反論できなかった。
「話は終わりか？なら出て行ってくれよ。俺寝るから」
そう言い一夏は寝間着に着替えて布団に入ってしまった。
まだ数分後には全員、残っていたが一人また一人と出ていき
最終的に一人を残して出て行ってしまった。
「何か用か？簪」
「一夏、何かあったの？」
「さっきも言っただろ？何もない、ただ気づいただけ」
「それでも！　それでも前の一夏なら諦めずに努力してた！
私にも前にそう言ったのに、何で自分は諦めちゃうの？」
「簪・・・・」
簪は涙を流しながら一夏に訴えていた。
「ねえ、もうちょっと頑張ろうよ。また皆と特訓しようよ」
「簪、俺はもう何やっても意味ないんだよ。
勉強もＩＳも何もかも意味ないんだ」
「何で？何でそう考えるの？」
簪は何度も手で涙を拭うがその動作が意味を為さないほど
涙があふれていた。
「簪」
「え？」
一夏は泣いている簪をそっと抱き締めた。
「い、一夏？」
好きな人に抱きしめられ思わず簪は顔を赤くしてしまった。
「簪。お前はこれからも頑張っていけ。お前には俺と違って
才能もあるし勉強も出来るし何より、
お前には超えたい人もいるんだろ？」
「うん」
「だったらこんな所で俺に合わせて止まるんじゃなくて進み続けろ。
そうすれば必ず超える事が出来る」
「なら一夏も一緒に進もうよ」

「いいや、俺は最初から無駄だったんだ。
何もかも。生まれたことすら無駄だったんだ」
その言葉を聞いて簪は一夏の頬を叩いた。
「一夏の馬鹿！もういい！一夏なんか知らない！」
そう言い残し部屋を出ていった。
『よかったの？』
「ファントム」
『あの子ならこっち側に連れてこれたんじゃないの？』
「いや、あいつはこっちに来てはならない。きっとあいつは
これからたくさんの人々に囲まれて生きていく。
そんな奴を潰す訳にはいかない。あいつだけはな」
『ふ～ん。良かった、貴方の憎しみの炎は消えてないみたいね』
「当たり前だろ。俺はあいつらをぶちのめす！何があってもな！」
『ふふふ、それで良いわ。それでこそ貴方よ』
「ああ、俺はあいつらを必ずぶちのめす！」

第十五話　少年の諦めと少女の涙（後書き）

こんばんわ～如何でしたか？
それでは、さよなら～

第十六話　簪の決心

簪ＳＩＤＥ
あの後、簪は部屋に帰り布団にくるまって泣いていた。
〜何で気付かなかったんだろ。一夏があんなにも苦しんでたのに気づくことすらできなかった。助けてもらったのに〜
簪の心の中では後悔の念と自責の念が入り混じっていた。
僅かながらに怒りも感じていた。
一夏が最後に言った生まれた意味がないという発言を聞いたときは思わず
叩いてしまった。今の一夏が前の自分とあまりに似ていたからだ。

〜一夏に会う前はわたしもずっとああ思ってた。
何で私は生まれたんだろう、生まれても意味がないのにって思ってた。
でも、一夏に会って初めて私は生まれてよかったって思えた。
一夏がいるからから今の私がいるようなもの〜
そして簪は決心する。

〜だったら私も一夏を助ける！私を助けてくれた時みたいに今度は私が一夏を助ける！〜

翌日〜
「ふぁぁぁ〜眠い」
一夏はいつも通りぼさぼさの髪の毛で食堂にやってきた。
そこにはいつものメンバーも何人かいたが昨日の今日とあって誰も話にこなかった。

一人を除いて
「お、おはよう一夏」
「ん？ああ、おはよう簪」
「隣良いかな？」
「どうぞご自由に」
簪は遠慮気味に隣に座りチラっと一夏の顔を見ると
頬がよく見ないと分からないが赤くなっていた。
そのまま何とも言えない空気が二人の間に流れた。
「ね、ねえ」
「ん、何だ？」
「昨日の言ってた事は本気で思ってるの？」
「昨日？ああ、あの事か。ああ、本気だよ。
まあ、俺を生んでくれた人には感謝はしてるさ。
お腹を痛めて俺を生んでくれたんだからな」
「じゃあ！」
「でも、俺は生まれても生まれなくても左程変わらないんだよ」
「そんな事ないよ。一夏がいなくなったら悲しむ人だっている」
「だろうな、でもその内忘れる。その程度の存在なんだよ」
一夏の目は昨日と同じで光がともっていなかった。
笑っているのに心の底から笑っていない、そんな感じがした。
「ま、お前は頑張れよ。俺は傍観しておくよ」
そう言い残し一夏は食堂から出ていった。

授業中～
一夏はボケっとしながら授業を受けていた。
〈何で簪は話しかけてくる。あいつらは話しかけてこなかったのに
あいつだけはいつも通りにこっちに来た。何故？〉
「じゃあ、織斑君、答えて下さい！」
「へ？」

「織斑、聞いていたか？」
「聞いていませんでした。どこですか？」
教室に出席簿のいい音が鳴り響いた。

「まだ痛いし」
一夏はアリーナにいた。
いつものメンバーはどうやら模擬戦をしているようだ。
〜よくやるね〜あんなめんどい事を
ま、候補生だからか。よくあんなめんどい事をしてるよ〜

模擬戦をしている少女達の心情は同じだった。
今の一夏は戦意がないし、戦う力もない。
ただでさえ組織などに狙われているのに。
だったら自分が一夏を護る。
少女達の気持ちは同じだった。
大好きな人のために力をつけ護る。

それから何日か経ち11月に入ろうかという時に電話が入った。
「はい、もしもし」
『私よ』
「どうかしたのか」
電話の相手はスコールだった。
『貴方に任務があるの。こっちに来れるかしら？』
「分かった。少し時間がかかるがそっちに行く」

少年の戦いが始まろうとしている。

第十六話　響の決心（後書き）

こんにちわ～ケンです。
如何でしたか？
それでは、さよなら～

第十七話　一夏の初任務

今、一夏はスコールから任務内容を聞いていた。
「で？任務内容は何なんだ？」
「任務内容は銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）の奪取よ」
「福音か。懐かしいな」
「何でだよ」
オータムが割り込んできた。
「臨海学校でひと悶着あったんだ」
「あっそ」
「それで俺一人か？」
「いや、今回は初めてという事もあるから彼女に行ってもらうわ」
「本気か！スコール！」
「ええ、彼女にも会わせとかないといけないから」
「誰だそいつ？」
「ま、会えば分かるわ。もう直帰ってくるし」
その時ちょうどドアが開いた。
「噂をすればね。エム」
「なん・・お前！！」
「またこのパターンか」
「織斑一夏！！！」
エムはＩＳを展開し殴りかかって来たが一夏は
炎の剣を出しエムに掠らせた。
「そんな物で何ができる！」
「さあな？」
エムはまだ腕が燃えている事に気付かなかった。
「終わりだ！」
「終わるのはお前だ」
一夏が言い終わると同時にさらに激しく燃え始めた。

「な、何だこれは！？」
「ひとまずＩＳを直して頂戴、エム」
「ちっ！」
エムがＩＳを戻すと同時に炎が消えた。
「スコール！どういう意味だ！？」
「こう言う意味よ」
「何故こいつがここにいるんだ！」
エムが声を荒げてスコールに詰め寄った。
「彼はもうこちら側の人間。仲間よ」
「何！？」
「そう言う意味だ。ま、よろしく頼む。先輩」
「ちっ！」
エムが出ていこうとするがスコールが呼びとめた。
「待ちなさい、エム」
「何だ！」
「貴方に任務があるの」
「任務？さっき行ったばかりだぞ！」
「まあね。彼の初任務について行って欲しいの」
「ふざけるな！なぜ私がこいつと行かなければならない！」
「まあそう言わずに」
「くそ！さっさと来い！」
「了解」

一夏はエムに連れられ外に出ていった。
「意外だな。あいつが簡単に行くなんて」
「ま、何か問題は起こすでしょうね」

北アメリカ北西部、第十六国防戦略拠点地。
通称地図（イレイズド）にない基地のはるか上空に二人はいた。
「へ～ここにあれがあるのか」
一夏は感心したように呟いた。

エムはというと・・・・
{なぜ私がこいつと一緒に来なければならん！}
激怒していた。なんせ恨んでいる相手と一緒にいろと言われれば致し方ない。
「それよりもどうする気だ？」
「何が？」
「お前、顔を隠さずに行くのか？」
「ああ、そういう事」
「簡単に言うがお前は世界で一人しかいない男性ＩＳ操縦者だぞ顔が割れたらすぐに捕まる」
「へ～心配してくれてんの？」
「ふん！誰が貴様など心配するか！」
「へえへえ、まあそれに関しては問題はない」
「何？」
一夏が顔に手をやると顔に黒い炎のような物が集まりだしそして仮面が形成された。
「な！」
『どう？これでバレナイでしょ？』
一夏の言うとおり顔は完全に隠れておりなおかつ声も女性の物になっていた。
「・・・・・きもいぞ」
『分かってるわよ。でもこうしないとばれちゃうでしょ？』
「それはそうだが・・・・・」
『ま、良いじゃない。すぐに終わらせてくるわ、エム』
そのまま一夏は降下していった。
「織斑一夏、貴様の力を見せてもらうぞ。もし、私が必要ないと判断した場合貴様を殺す！」

「よお、交代だ」

「ああ、すまない。今日も良い天気だな」
「そうだな。ん？何だこれ？」
「黒い羽？」
視線を上にあげた瞬間、何かが墜落したような音が響いた。
「な、何だ！？」
「分からん！警戒しろ！」
「ああ！」
二人は銃を準備しいつでも撃てるした。
『痛いわね～操縦ミスったかしら？』
『ほざけ。貴方がわざとしたんでしょ』
『ま、そうだけど』
「だ、誰だ貴様は！ここをどこだと思っている！」
『ん？さあ？』
「ふざけているのか！」
『別に～ま、目的はあるけどね』
「何！？」
『ここに凍結封印されている福音の奪取』
「な、なぜそれを！？」
『いちいちうるさいわよ』
そう言った瞬間、兵士が吹き飛ばされた。
「ぐあ！」
「くそ！応援要請！、応援要請！６－Ｄエリアに応援要請！」
『うるさい』
その一言で先ほどよりも大きな爆発が起き大勢の兵士が吹き飛ばされた。
「「うわぁぁぁぁぁぁ！」」
『えっと、福音さ～ん！どこなの～』
『馬鹿か。向こうに反応がある』
『オッケ～』
一夏は黒い翼を展開し一気に突き進んだ。

その途中で何度も対ＩＳ用の兵器が来たが全て
黒い炎により燃やしつくされた。

通路を抜けると天井が高い部屋に入った。
『あら？ここどこかしら？』
そこらを探索していると目的の物が目に入った。
『あ！見っけ！』
それに手を触れようとしたとたん光の矢が飛んできた。
『普通はこういう感動の場面では何もしないのが決まりよ？』
「そう言うわけにはいかないの」
そこには金髪の美女がいた。
『確か、貴方は・・・』
「ナターシャ・フィルスよ」
『そうそう、で？何の用？』
「あの子は渡さない！」
立て続けに光の矢が飛んできた。
『凄いわねえ！生身でＩＳ用兵器を扱うとは』
「まあ、これでも鍛えてるからね！」
そして次第に狭い部屋に矢が充満していった。
『あら？逃げ場無し？』
「そうよ！」
一気にそれらが爆発した。
「進入者だって聞いてどんな子かと思ったらこの程度ね」
そのまま帰ろうとした時・・・
『誰の事かしら？』
「な！何なのその炎は！？」
『こんなもの、おいしいおやつよ』
全ての光の矢が炎に喰われていた。
「くっ！」
もう一度撃とうとするが矢が発射されなかった。

いや、その武器自体が炎によりエネルギー切れとなっていた。
「な！こんな事が！」
『余所見厳禁、火気厳禁よ』
「しまっ！」
そのまま壁に吹き飛ばされてしまった。
「ぐぅ！」
『ま、良くやったわ。でも私じゃなかったらね』
そのまま一夏は福音を縛っていたエネルギーを焼き切り
福音を担いだ。
『この子は貰ってくわね。ここにあっても宝の持ち腐れってやつよ。
知ってる？日本の・・・何だったかしら？まあいいわ』
去ろうとする一夏の足が何かに掴まれた。
「ま、待ちなさい。その子だけは連れていかせない！」
『ふふ、この子を子供のように思ってるのね。
涙が出ちゃう。でも、所詮国から見たらただの兵器よ』
「わ、分かってるわ。それでも！」
『うざい』
その手を足で蹴飛ばし出口へと向かっていった。
「待って・・・・」
そのまま意識を失ってしまった。

『むむ！狭くて通れないわね。どうしよ』
ＩＳをそのまま担いでいるため引っかかって通れなかった。
『面倒だし。天井を吹き飛ばすかな？
ダークネス・オーバーロード！！』
一夏の周りに炎が集約され一気に天井に放出された。

『ふ～。行きしなもこうすれば良かったわね。反省』
そのまま帰ろうとした瞬間・・・
「待ちやがれ！」

『あら？』
もう一機のＩＳが現れた。
「そいつを返してもらおうか？」
『嫌よ、この子は私の物よ！』
「ガキ、今返したら怒らねえから返せ」
『絶対に嫌だ！おばさん！』
「お、おばさんだと？このがきゃー」
そのまま直線に突っ込んできた。
『ふふふ』
しかしそれを避けようとせずにただ突っ立っていた。
「うらぁぁぁぁぁ！」
逆手に持ったナイフが言葉の通り貫いた。
「な！なんだこれ！？」
貫いた瞬間、炎となりおばさんを燃やし始めた。
「くそ！何だってんだよ！エネルギーが減ってんじゃねえか！」
『あんまり怒るとしわ増えるわよ？お・ば・さ・ん』
「何なんださっきのは！？」
『お礼に教えてあげる。さっきのは蜃気楼よ。ま、怒ってたからバレなかったんだけどね』
「待ちやがれ！」
飛行しようとするが炎によりエネルギーが尽きてＩＳが解除された。
「くそ！何でだ！？」
『じゃあね～』
「くそがぁぁぁぁぁ！！」

第十七話　一夏の初任務（後書き）

こんばんわ～ケンです。
遂に任務が行われ福音が奪われました！
ここから一夏の復讐劇が本格的に始動です！
ちなみに仮面はマンガから取りました。
では、さよなら～

第十八話　家族のような光景

アメリカ某所～
ある会議室で合衆国のトップたちが密談をしており
怒号が鳴り響いていた。
「どういう意味だ！」
「申し訳ありません！」
「我が国のＩＳが奪われたのはこれで二機目だぞ！
それを分かっているのか！？」
「分かっております！」
「ならば何故、代表とテストパイロットがいながら
死守すら出来んのだ！」
「申し訳ありません！現在、軍の総力をあげて奴の情報を
集めております。必ず捕まえてみせます！」
「そんな事は誰でも言えるのだ！それでも我が国のパイロットか！」
「「申し訳ありませんでした！」」
「もう良い！出ていけ！奴を捕まえるまで
私の前に顔を見せるな！」
そのまま二人の女性は部屋から出て行った。
「それで情報は集まってるのか！」
いかにもお偉いさんというオーラを出してる人物が
傍にいた側近に怒鳴った。
「残念ながら一切出てきておりません」
「くそ！これでは他国のいい笑いものだ。
この事は絶対に外に流すな！いいな！？」
「は！」

「くそが！あの豚野郎が！こっちの身にもなれってんだ」
「落ち着きなさい。イーリ」

「お前はそれで良いのか！？ナタル！」
「私だって気分は最悪よ。でもそんな事をしてるよりも
一刻も早くあいつを見つけるわよ。おこるのはそいつに怒りなさい」
「ちっ！分かったよ」
二人は自らの持ち場へと戻っていった。

少し時間を遡りアメリカ上空～
「お前、それ・・」
『どう？凄いでしょ？奪ってきちゃった。私天才かも！』
エムは目の前の状況に頭の整理がついていけなかった。
なんせ一人で軍に特攻していき
ほぼ無傷で国家代表を圧倒し
あまつさえＩＳまでも奪ってきた事に驚いていた。
『さ、帰りましょ？エム。私お腹減っちゃった』
「おい」
『何？』
「私はお前がこの任務で失敗すれば殺すつもりだった
だが、貴様は成功させた」
『そうね。で？どうするの？』
「認めてやる。貴様をこちら側の人間だとな」
『ふふふ、それはありがたいわね。大先輩に
認められたらこの先安泰だわ』
「それよりこれからどう呼べばいい？」
『あ～そうだったわね～う～ん・・・・・
決まったわ！ゼロ。うん、ゼロが良いわ』
「分かった。これから頼むぞゼロ」
『ええ。それよりも帰りましょ？』

ＩＳ学園～
「あれ？一夏は？」

今は夕方だがいつもなら一夏が部屋でグータラしているのだが
部屋にもいないので探しているというわけである。
ちなみに簪は一夏を少しでも良いから前に戻って
もらうべく特訓に誘おうとしているのである。
「え？外泊届！？」
「はい、そうですよ。確か2時間ぐらい前くらいに
急いだ様子でこれを出していきましたよ？」
「はあ、そうですか。ありがとうございます」

{おかしい。確かこの前も出してたよね？
何で連続で出したんだろ。今度聞いてみよ}

「あらお帰りなさい。二人とも。成功したみたいね」
『まあね～』
「ゼロ、そろそろ止めたらどうだ？
本当にキモイぞ」
そう言われ一夏は仮面をなおした。
「ふ～そう言うなよ。こうしないとばれる」
「そう言えばゼロって？」
スコールが不思議に思い質問した。
「こいつの名前だ」
「そう、良いじゃない。でもここでは良いわ。
任務中はそう呼ぶわ」
「そうするかな。その前に腹減った。何かないか？」
「ふふ、そうね。そろそろ夕御飯の時間だし
何か食べましょうか。オータムもエムもね」
「「ああ」」

＜とある構成員の証言＞
連れ添いながら入っていく様子はまるで本物の家族のように見えま

した。

第十八話　家族のような光景（後書き）

こんばんわ～模試が終わって修正しているとこんな時間になったケンです。
如何でしたか？
感想やレビューも待ってま～す。
それではさよなら～

第十九話　気持ち

翌日～
一泊向こうで泊まった後、学園に帰ると簪に絡まれた。
「あ！こんな所にいた」
「簪・・・」
「一夏、ちょっとついて来てくれる？」
「めんどくさいことじゃなかったらいいけど」
「うん、めんどくさい事じゃないよ」
「・・・やっぱ、行かない」
「そういわずに行くよ」
「お、おい！引っ張るな！服が伸びる！」

そのまま簪に手を引かれ連れてこられたのはアリーナだった。
「何でこんな所に」
「さ、特訓しよ？」
「・・・帰る」
そう言い帰ろうとする一夏の
足元の地面が突然、炸裂した。
「うお！何すんだよ！殺す気か！？」
「さ、一緒にしよ。ね？」
その笑顔は文句は言わせないぞという
オーラを漂わせたものだったという。
「分かったよ。はいはい、やりましょうか」
「うん！」
こうして二人の特訓が始まった。

とは言ってもただ単に模擬戦をするだけであるが。
「いや～簪は強いな～」

結果は簪の圧勝だった。
「・・・・・」
「流石わ代表候補生だな。俺みたいな奴が適う訳がねえよな」
「ねえ、一夏」
「ん？何だ？」
「さっきの模擬戦、本気だった？」
「ああ、本気だったぞ」
「じゃあ、どうしてあの時ブレードで切れる時に切らなかったの？」
「それはお前から見たらだ。俺から見れば・・」
「嘘つき！」
「！！！！！」
突然、簪が声を荒げた。
「一夏は剣が得意だったよね？さっきのは素人の目から見ても切る所だった。それなのに一夏は切れなかったって言った！違うよ！一夏は切れなかったんじゃなくて切らなかったんじゃないの？
ねえ、答えてよ！」
「・・・・・帰るわ」
「一夏！」
「もう俺を誘うな。お前まで気分が悪くなる」
「ねえ！言ってよ一夏！」
「・・・・・」
「ねえ！聞いて」
「うるさい！」
「！！！！！」
「さっきからお前は俺の何なんだ！
お前に何が分かるんだ！？」
「い、いち」
「俺の事なんかほっとけよ！お前に関係ないだろ！」

「ご、ごめん」
「ちっ！」
そのまま一夏は去ってしまった。

一夏の部屋～
「くそ！！」
一夏はイライラしながらベッドに横たわった。
『珍しいわね。貴方が感情的になるなんて』
「ファントムか。どういう意味だ？」
『だってそうでしょ？貴方は彼女たちに誘われても頑なに拒否して諦めさせるのに、今回は特訓に応じた所か貴方は彼女に怒った。
ほかのメンバーとは明らかに怒り方が違ってた。
まるで、あなたの本心を見てもらいたいかの様に』
「・・・俺でも分からない。
ほかの奴らに言われるとどうでもよく感じるのに簪に言われると無性に腹が立つ。
それに今は後悔もしている」
『ふふふ、人間は面白いわね』
「そうかよ・・・寝る」
『はいはい、御休み』

こうして一夏は意識を落とした。
簪の事を頭に浮かべながら。

第十九話　気持ち（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
感想も待ってます。
それでは～

第二十話　その気持ちは何か？

翌日～
「よ、よう簪」
「・・・・・」
そのままスルーして行ってしまった。
〜お、怒ってるのか？〜
『当たり前でしょうが』
〜ファントム・・・〜
『あれで怒ってないなんて思う奴はよっぽどの馬鹿かわざとしてるとしか思えない、と人間は考えるんじゃないかしら』
〜あ～もう！どうすれば、良いんだ～〜
これは青春を送っているある少年の物語。

〜ひとまず簪に謝るか？〜
一夏は休み時間にボケーっと考えていた。
〜でも、俺の事がばれてもダメだしな～〜
『だったらばれない様に謝ればいいんじゃない？って人間は言うわよ』
〜そのバレない方法が知りたいんだけどな～〜
「は～」
一夏の悩みは続いて行く。

そして昼休み～
〜よし！なら昼を誘ってそこで謝ろう！〜
そう考えていると目の前に簪が見えてきた。
〜よし！〜
「か、簪」
「・・・・」

見向きもせずに行ってしまった。
「そ、その何だ？昼飯でも一緒にどうだ？」
「・・・・」
またまた無視。
「え、えっと、簪さ～ん」
「・・・戦いで手加減しているような人と話さない」
「だからあれは俺の本気だって！」
「嘘。私から見たら手加減されている風にしか見えなかった」
「だから～ほら、あれだよ。スポーツで経験者と素人が試合するようなもんだよ。経験者から見たら本気出してんのか？みたいな感覚だって！」
「・・・・・」
そのまま早足で帰って行ってしまった。
「な、何でだよ」
『は～』
ファントムが盛大な溜息をついた。

簪ＳＩＤＥ
簪はお昼を食べながら考えていた。
〜あれから撮っておいた映像を何度も見たけど絶対に一夏は手を抜いていた。
なのになんで皆はそれに気付かないの？〜
実はあの後、簪は一応一夏の言っている事も考慮に入れて皆にその映像を見てもらった。
勿論、先生方にもだ。
しかし、皆、口をそろえていったのが
「いつもの一夏じゃないか」
皆にはそういう風に見えていたのだ。
皆は同じクラスだから一夏の変化に気付かないのかもしれない。
〜絶対に一夏は手を抜いていた。今の一夏より

前の一夏の方が強かったのに今ではその面影も見えない〕
だから簪は決心した。
〔一夏が認めるまで絶対に話さない〕

それから簪の決心は強かった。
どれだけ一夏に喋りかけられても無視、もしくは冷たくあしらう。
しかし一夏も一夏だった。
どれだけ無視されても喋りかける。
まるで恋をした少年のように。

〔あ～今日も簪に無視られた〕
あれから5日くらい無視されているのである。
『ねえ、一ついいかしら?』
「何だ?」
『どうして貴方はそこまで彼女に拘るの?』
「それは・・・・」
『だってそうでしょ?他のメンバーは気にしないのにあの子に無視されると必死に喋りかける。
矛盾してない?』
「・・・・・」
『ま、所詮私は機械。人間の感情は分からない。寝るわね、御休み』
そう言いファントムは機能を一時停止した。
「・・・・寝よ」
一夏も眠りへと入った。

翌日～
今日も一夏は喋りかけていた。
しかし、今回は雰囲気が違った。
「簪。話があるんだ。部屋まで来てくれ」

「・・・何故？」
「この前の事についてだ」
「！！・・・分かった」
そのままその日は放課後まで喋らなかった。

放課後～
「一夏？入っても良い？」
「ああ、どうぞ」
「お邪魔します」
時間は２０時ジャストだった。
「悪いなこんな時間に」
「うんうん」
「それでだ。この前のことなんだが」
「・・・・」
「本当にあれが今の俺の実力なんだ」
「嘘」
「嘘じゃない。俺はただ単に白式がハイスペックなだけだったんだ」
「違う。あれは間違いなく一夏の実力だよ」

「違う。お前が手をぬいているって感じたのもそれだ。
訓練機になったとたんに俺は弱くなった。
つまり白式のお陰だったんだよ」

「何で？何でそこまで一夏は自分を下に見るの？
そりゃ、一夏はＩＳの図面だって読めないし
整備だって出来ないよ？でも、それはただ単に
詳しく勉強していないからだよ」

「いいや、簪だって分かってるだろ？
放課後遅くまで残って簪にＩＳの事教えてもらっても

結果はあれだ。過程は関係ない」
「違うよ！」
「！！！！」
「あれはただ単に私の教え方が
下手なだけだったの！一夏は・・」
「もう良いよ。その気持ちだけでも嬉しいよ」
「一夏・・・・」
「だからさ簪。明日から」
「嫌、嫌！言わないで！」
「簪？」
簪が突然泣き出した。
「一夏は私も離すの？そんなの嫌だよ！
私は一夏の傍にいたい！」
「な、何を勘違いしてんだ？」
「え？」
「俺は明日から放課後にＩＳの事教えて
くれないかなって言おうとしたんだが」
「え？そうなの？」
「うん」
簪は突然、顔を赤くした。
「は、早く言ってよ！恥ずかしい！」
〜あ〜顔を真っ赤にしてる簪も可愛いな〜〜
「え、えっと、そのじゃあ明日から特訓するんだよね？」
「ああ、頼んでも良いか？」
「うん！勿論だよ！」
簪の笑顔を見て一夏の心臓は高鳴った。
簪に聞こえるんじゃないかというほどに。
〜な、何だこれ？何で簪の笑顔を見ただけで
こんなにドキドキしてんだよ。
そ、そりゃ簪は可愛いとは思ってるけど

そ、そんな目で見ている訳では〜
「ん？一夏、顔赤いよ？」
簪が一夏の顔を見ようと顔を近づけた。
「な、何もない！じゃ、じゃあそう言う事でお、御休み！」
「う、うん御休み」
半ば強引に部屋から追い出した。
〜やばかった。あれは本当にやばかった。一瞬、理性が崩れかけたぞ〜
『貴方、結構ひどいのね』
「気付いてたのか」
『ええ。どうせ貴方は怪しまれないように彼女との特訓を始めた。そうすれば気付かれる可能性も少なくなったってことでしょ』
「まあな、これもあいつらをぶっ潰す為の布石だ」

その頃、簪は・・・
〜やった！一夏と特訓。そ、それに二人っきり。
う〜、か、軽くお化粧とかしようかな？
い、いやただの特訓だし、そんな事をしたらダメだよ！
うん！駄目！〜
顔を緩めながらスキップで部屋まで帰っていった。

一夏の真意にも気づかずに。

第二十話　その気持ちは何か？（後書き）

Ｇｏｏｄ，ｍｏｒｎｉｎｇ！
ケンです。
如何でしたでしょうか？
最近、ほかのメンバーが出せない（泣）
一夏はじきにその想いに気付きます。
では、行ってきま～す。

第二十一話　かくして少年、いや少女は動き出す

十一月にも入り少し肌寒くなった今日この頃。
ＩＳ学園の制服も冬服になった日の事。
「は？専用機持ちだけのトーナメント？」
「うん」
一夏が簪との特訓も終わり二人で休憩している時の事だった。
「何なんだそれ？」
「お姉ちゃんによると最近、いろんな事があったから休憩がてらにってことでやるんだって」
〜前にもそんな事でやってたような〜
「あっそ。別に俺には関係ないけど」
「そ、そうだけど、応援くらいには来てくれる？」
涙目で上目づかいをされた。
〜うぅ。そ、そんな目で見るなよ〜
「ねえ、聞いてる？」
「わ、分かったよ。行くから」
「ほんと？ほんとだよね？」
「ほ、ほんとだから」
「やった！ありがと！私頑張るからね」
一夏は満面の笑みを喰らい心臓が高鳴った。
〜ま、まただ。また心臓が鳴りまくってる〜
一夏は顔を赤くして目を背けた。
「あ、ああ頑張れよ」
「うん！じゃあ、特訓再開しようか」
「ああ」
そして特訓が再び始まった。
特訓も終わり部屋に戻った一夏は

スコールに電話をしていた。
「俺だ」
『あら、どうしたの一夏君？』
「再来週から専用機持ちだけのトーナメントが行われるらしい」
『へ～面白いわね。そうね～』
「俺に考えがあるんだが良いか？」
『別に良いけど、どうする気なの？』
「俺の存在を知らせようかなと」
『そうね～どの道知られるのも時間の問題ねいいわ。好きにしていいわよ。その代わりやり過ぎには気をつけてね？』
「ああ、分かった」
一夏の顔は笑っていた。
だが、普通に笑う顔ではなく邪悪に染まった笑顔だった。
「はは！これで、ようやくあいつらを捻りつぶせる。首を長くして待ってろよ。馬鹿ども」
その日はそのまま眠りについた。

そして日が経ち当日となった。
「ふぁぁ～寝み。当日か。は～めんど」
一夏は顔を洗い、服を着替えた。
「さ～てと、まずは簪の応援か。は～」
ひとまず一夏は朝食を取りアリーナへと向かった。

「やあ、皆おはよう。元気かしら？」
「「「「会長～～～」」」」
「あらあら、皆、元気すぎるくらいね」
会長による開会式が始まった。

「今日は息抜きの感覚で見てもらったら結構だけど
皆、強いから奪えるとこは奪って自分の物にしてね」
〜はは！お前のその上から目線も相変わらず
うざいな。ひねりつぶしたい〜
「てことで毎回恒例の博打を始めるわよ〜」
「「「「いえーーーー！！」」」」
〜またかよ〜
「今回は前に書いてもらったものを集計したみたわ。
それで予想が当たった人には
なんと！学食デザート半年分あげちゃうわよーー」
「「「「「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」」」」」」
〜うぜえ。馬鹿か〜
「てことで始めるわよ〜」
「「「いえぇぇぇぇぇ！！！」」」

今、一夏の目の前では代表候補生
との戦闘が行われていた。
すると突然、一夏の携帯が鳴った。
「もしもし、俺だが」
『ああ、私だが』
「エムか、出来たか？」
『ああ、準備は整ったぞ。お前の言うとおり
学園の電子回路は全てお前のいるアリーナだけ
破壊しておいた。まだ、気づかれてはいない。
やるなら今だぞ。ゼロ』
「ああ、ありがとう。今度何か奢ってやる」
『ふん、楽しみにしてるぞ』
「ああ」
それを最後に電話は切られた。
〜はは！ようやくだ。ようやく俺・・・

いや私の強さを奴らに見せつけられる。
待ってろ。屑ども」

第二十一話　かくして少年、いや少女は動き出す（後書き）

こんばんわ～です。
如何でしたか？
次回でゼロの正体が学園に知られます。
それでは～

第二十二話　ゼロの力（前書き）

今回は少し長めです。

第二十二話　ゼロの力

現在アリーナでは箒と楯無による対戦が行われていた。
「なかなかやるようになったじゃない。箒ちゃん！」
楯無は剣をさばきながら嬉しそうに言った。
「日々の貴方の訓練のお陰ですよ！」
箒も自信があったのか
嬉しそうに答えた。
「絢爛舞踏も自由に使えてるみたいだしね！」
「そりゃどうも！」
いったん二人は距離を取った。
「お姉さんは感激だわ」
「ははは、そうですね」
「そろそろ終わりに・・・・・何これ？」
「これは？」
楯無と箒のいるアリーナ一帯に黒い羽が舞っていた。
「黒い羽？カラスかしら？」
「カラスだけでこんなに舞いませんよ。楯無さん」
するとオープンチャンネルから千冬の声が聞こえてきた。
『どうした二人とも？』
「あ、織斑先生。実は黒い羽が舞ってるんです」
『黒い羽だと？こちらからは何も見えないが』
「そんな事は」
すると突然、観客席から声が上がった。
「何あれ！」
「「？？？」」
二人は上を見上げるとそこにあったのは・・・
「黒い炎？」
そこには黒い炎に包まれた何かが徐々に降りてきていた。

その姿はまるで悪魔に翼が生えたような格好だった。

その頃～

「山田君、念のため警戒レベルを引き上げてくれ」

「分かりました」

山田先生がその動作をしようと入力するが

警報は鳴らなかった。

「あ、あれ？」

「どうした、何をしている？」

「わ、分かりません。こちらの指令を一切寄せ付けません！」

「何だと！？」

それから何度も指令を伝えようとするが一切反応しなかった

「くそ！どうなっている！」

そりゃそうである。元の電源が切れていれば

何度しても一切反応しないはずである。

『・・・・・』

「貴方は何者なの！？いったい何の理由で

ここに侵入したの！？」

『ふふふ、まあそんなに怒りなさんな。

折角のきれいな顔が皺だらけになっちゃうわよ？』

「そんな事より貴様は誰だ！？」

『は～せっかちね～ま、いいわ。

ねえ、私も混ぜてくれない？

なかなか楽しそうな事してるじゃない、貴方達』

「ふざけるなー！」

「箒ちゃん！」

箒が二本の刀で攻撃してきたがゼロは

片手で二本とも受け止めてしまった。

「な！」
『え～こんなもの？こんな奴に最強のＩＳを渡すなんて篠之ノ博士も目がないわね～』
「何！？」
『雑魚には興味無いの。消えて？』
ゼロは箒にボディブローを入れると
箒は腹を抱えてしゃがみこんでしまった。
「箒ちゃん！」
「ぐ・・う」
『え～結構手加減したのに～』
「箒ちゃんから離れなさい！」
楯無が攻撃してきたがそれを
難なくゼロはかわして一旦距離を取った。
『あら、貴方羨ましいわね。その巨乳。私なんかまな板なのに。どうやったら大きくなるか教えてくれない？』
〜何なのあの子？調子が狂う〜
『ま、いいわ。そろそろ着たようだし・ね！』
ゼロが高速で避けるとゼロが
いた場所が突然、爆発した。
「そっち行ったわよ！」
ゼロの頭上から青色の光が何本も降りてきていた。
『ふ～ん』
ゼロは避けようともせずただただ立っていた。
「喰らいなさい！」
着弾した瞬間に大量の弾丸とミサイルが降ってきた。
「やったね！」
「まだ気は抜くなよ？」
そこには鈴、シャルロット、ラウラそして簪がいた。
「みんな！どうして！？」
楯無が驚いたように聞いた。

「織斑先生が緊急事態が発生したからすぐに来いって言われて」
「大丈夫か!?箒!」
「ああ、すまないラウラ」
「ひとまず、侵入者って聞いたけど呆気なかったわね」
『それはこっちの台詞よ～』
「「「「!!!!」」」」
「そ、そんな!?あれだけの攻撃を喰らっていながら無傷だなんて」
『避けるのめんどくさかったから
避けないであげのに、こんなに弱いなんてね』
「あんたは何者なのよ!?」
鈴が声を荒げて言った。
『そんな事はどうでもいいわ。かかってきなさい。全員でね』
「貴様、正気か?」
『ええ、正気よラウラちゃん。
貴方達ごときでは私に攻撃何か与えれれない』
「言うじゃない!上等よ!」
鈴がゼロに突撃していった。
「待て鈴!くそ!」
全専用機持ち対ゼロの戦いが始まった。

「喰らえ!」
鈴が龍砲を放つがそれを一夏は見向きもせずに全て避けた。
「そ、そんな!」
「今度はぼくが行く!」
シャルロットがマシンガンをコールしゼロに向けて撃ち始めた。
『は～遅』
それをゼロはいとも簡単に全て避けた。
「ラウラ!」
「任せろ!」
ラウラがエネルギー手刀で接近戦に来た。

「貴様はいつまで丸腰のままでいる！？」
『ん～いつまでかしらね～』
「なめるな！」
『ふふふ』
このような戦いが数分間続けられた。

『ん～そろそろかしら』
「ようやくかしら？」
『ええ、ごめんなさいね？会長さん』
「さっさと来い！倒してやる！」
ダメージから回復した箒も参戦していた。
『始めましょうか！まずは使い捨て武装その一、ギガント！』
ゼロが名前を呼ぶとともに武装が現れた。
「あれは？」
『よく見て避けないと当たるわよ？』
引き金を引いた瞬間凄まじい速度で
数える気すら起こらない程のミサイルが
発射されていった。
「な、何なのよこれは！？」
「そんな事はどうでも良い！避けろ！」
全員、避けるがミサイルが追いかけてきた。
「な！追尾性能まで」
『そうよ～これはね追尾性能がある武装でね？
まだ試作機だけど威力は半端ないわよ？』
「きゃぁぁぁぁ！」
「セシリアちゃん！」
セシリアに一発のミサイルが着弾した瞬間
膨大な量のミサイルがそれに続き着弾していき
エネルギーが根こそぎ奪われＩＳが解除されてしまった。
『はっは～！！一匹目出来上がりよ～！』

「く！セシリア！」
「行くな！箒！」
セシリアを助けに行こうとした箒をラウラが止めた。
「何故だ！」
「今、貴様まで行けばやられるぞ！」
「くそ！」
全員がミサイルを避けるので精一杯だった。
『さ～てと次はあいつに決定！』
ゼロが標的にした人物、それは・・・
「鈴！後ろだ！」
「え？」
『ライダーキーック！』
蹴りを入れられた鈴がアリーナの壁にぶつかり
壁にひびが入った。
「がはっ！」
鈴は血を吐きＩＳが解除された。
「鈴ーーー！！！」
『二人目出来上がり～』
「よくも鈴をーーーーー！！！」
「よせ！シャルロットーーーー！！！」
『使い捨て武器その二、電気ビリビリ鞭』
ゼロは鞭を手にコールし撓らせた。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
激昂し周りの見えていないシャルロットはそのまま
シールドピアースを片手に突っ込んでいった。
「シャルロットー！」
ラウラの声も聞こえないほどに。
「喰らえー！」
最大速度の瞬時加速（イグニッションブースト）で
近ずき撃ちこもうとしたシールドピアースを

ゼロは避けて鞭をシャルロットに巻きつかせた。
「きゃ！何これ！？」
『ふふふ！電気ビリビリ開始！』
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”！！」
鞭を伝わり高圧電流がシャルロットに流された。
「シャルロットーー！！」
シャルロットは気を失いＩＳが解除されてしまった。
『これはね、ＩＳの絶対防御を貫くぐらいの
強力な電流を流してるの。いくら絶対防御が、
あってもそれは完全ではない。基本中の基本よ？』
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
親友を傷つけられ激昂したラウラが
エネルギー手刀を片手に突っ込んできた。
「戻りなさい！ラウラちゃん！！」
「あぁぁぁぁぁ！！死ねぇぇぇぇぇぇ！！！」
『使い捨て武器その三、何でも切っちゃう刀！』
ゼロは片手に長めの刀をコールした。
「あぁぁぁぁぁぁ！！」
ゼロはラウラの渾身の一撃をかわし
ラウラを一閃した。
その刀にはラウラの血が付いていた。
「ラウラーー！」
「そ、そんな。絶対防御すら切る刀なんて聞いたことがない」
『だから言ったでしょ？何でも切れる刀だって』
「くっ！」
『ねえ、それより彼はどこなの？』
「彼って誰の事かしら？」
『そっちの子は？』
「誰だそれは？」
『青髪は？』

「い、一夏の事？」
「「！！」」
『ふ～ん。そこの二人の中ではその程度の存在か～』
「い、いや違う！」
『よく言うわね？青髪の子に言われるまで気付かなかったくせに？』
「そ、それは・・・」
箒と楯無は何も言えなかった。
「そ、それで一夏に何の用なの？」
『いや～彼も専用機持ちだったでしょ？戦ってみたいな～
なんて思ってね。で？どこなの？』
「もう一夏は専用機持ちじゃないの」
『・・・そう残念。戦いたかったのに。帰るわ』
「・・・・・な」
「箒？」
簪が怯えたように聞いた。
「・・・るな、ふざけるな！」
「「！！！！」」
「貴様はこれだけの事をしておいて
帰るだと！？ふざけるな！
貴様は私が倒す！」
『無理よ、貴方達みたいな彼を
忘れるような人には私には勝てないわ』
「ふざけるなーーー！！！」
「箒ちゃん！もう！」
箒と楯無が同時に突っ込んできた。
『冥土の土産に見せてあげるわ？
私達の単一仕様能力（ワンオフアビリティー）』
それを最後に二人は黒い炎に飲み込まれた。
「お、お姉ちゃん、箒、皆」

簪の目の前には倒れた皆の姿が目に映ってた。
所々黒い炎が揺らめいているのが見える。
『ふふふ、後は♪』
徐々にゼロがこちらに向かっていた。
「ひっ！」
簪は恐怖に体を震わせその場から
動けないでいた。
『ん？』
「か、簪ちゃんには近づけさせない！」
『へ～これが姉妹愛ってやつか～・・・うざい』
「うぐ！」
ゼロは楯無の頭に足を乗せ地面に叩きつけた。
『さっきから簪ちゃん、簪ちゃんってうざいのよ』
楯無をほって近づいて行った。
「あ・・・あ」
『あひゃ！震えちゃって可愛いじゃない？
家に持って帰って愛でたいわね』
「ひっ！」
簪は頭を撫でようとするゼロの手を振り払い
どうにかして武装をだし攻撃しようとするが
それは既に炎によって使い物にならなくなっていた。
「そ、そんな・・・」
『あひゃ！泣いちゃって。さっきから見てたけど
貴方には戦いには向かないわ』
そのままゼロは踵を返した。
「ど、どこに行くの？」
『帰るの。もう用は済んだしね。また会いましょ？簪ちゃん』
そのまま翼を展開し去っていった。
その様子を簪はただただ見ることしかできなかった。

第二十二話　ゼロの力（後書き）

おはようございます。ケンです。
如何でしたか？
今回はヒロインボコボコの回でした。
感想も待ってます。
それでは～

第二十三話　After the accident

ＩＳ学園の人通りが少ない一角で仮面をつけた人物がいた。
『ふ～疲れた。ファントム、周りに人は？』
『いや、いないな。どうやら自室での待機命令が出ているようね。人っ子一人いないわ』
『分かった』
仮面を戻すと一夏の顔が見えた。
『どうだった？ボコボコにした感想は？』
「はは！最高だ！今まで生きてきたなかでここまで幸福感を覚えたのは初めてだ！」
一夏の顔はまるで子供が欲しいものを手に入れたそれと一緒だった。
「でもまだ足りない！もっとだ！もっとあいつらの絶望した顔が見てみたい！」
『ふふふ、それでこそ貴方だわ。あ、帰りましょ？』
「ああ」
自室へと向かっていった。

その頃学園は事後処理に追われていた。
負傷者の手当て、一般生徒への情報の流出を防ぐなどで追いまわされていた。

「ガーゼ持って来て頂戴！大至急！」
「あ～もう！休暇だったのに！」
医務室では大勢の医者が走り回っていた。
その中で簪は隅の方でベッドにいた。
怪我は無かったが念のためという事で

検査入院扱いだったが
ほかのメンバーはそう言う訳にはいかなかった。
打撲に内臓損傷、そして一番の重傷がラウラであった。
急所は外れていたが傷が深く未だに
手術室から出てきていなかった。
〜何にも出来なかった。皆、戦ったのに私だけ
怖くて何もできなかった〜
未だに簪はあの時の事を思い出すと体が震える。
〜一夏、怖いよ〜
簪は思い人の顔を浮かべ少しでも和らげようとしていた。

その頃一夏は〜
『まったく〜やりすぎよ？』
「あれでも大分手加減はした。本気で行けば
全員、当分は病院送りだぞ」
『まあ、それもそうね。御蔭で
こっちは学園の情報もいくつか手に入れられたし』
「へえ、面白そうだな。スコール、聞かせてくれよ」
『その話は今度こっちに来たら言うわ』
「分かった。じゃあな」
『ええ、御休み』
電話を切るとファントムが話し始めた。
『一夏、そろそろ』
「ああそうだな。行くかファントム」
一夏は服を軽く整えた後
部屋を出て医務室へと向かった。

簪が未だに震えていると突然、ドアがノックされた。
「ど、どうぞ」
「よ！簪、大丈夫か？」

辺りは真っ暗で皆、疲れてるのか
はたまた気を失ってるのか
起きている人は誰もいなかった。
「一夏！」
「簪？」
突然簪に抱きつかれ一夏は顔を赤くしてしまった。
「どうした？」
「一夏～」
よく見ると簪は震えていた。
「何かあったのか？」
「・・・ごめん。言えないけど少しこうさせて」
「ああ」

「落ち着いたか？」
「うん、ありがとう」
先程よりは体の震えは収まっていたが
未だに少し震えていた。
「そう言えば今日、何か侵入者が来たんだったよな？」
「な、何で知ってるの！？」
「そのアリーナに俺もいたからな」
「そ、そうなんだ」
「何があったのか教えてくれないか？」
「・・・誰にも言わない？」
簪が涙目で上目づかいをしてきたので一夏は思わず
顔を赤くして目を背けてしまった。
「一夏？」
「い、いや何でもない」
「そう・・なら言うよ？」
「ああ、頼む」

簪は今日あった事を全て包み隠さず話した。
自分の目の前で皆がやられていった事、
自分は怖くて何もできなかったを話した。
「そうか」
話し終えた簪はまた震えていた。
「やっぱり私は無理なのかな？
皆みたいに強くなれないの？」
「簪・・・」
一夏は今にも泣きそうな簪をそっと抱き締めた。
「一夏・・・」
「そんな事ねえよ。まだお前は経験が無かっただけなんだ。
皆は色々とああいう経験を積んでいたから戦えたんだ」
「ほんと？」
「ああ、お前は十分強いさ。だって
お前シャルに今日、勝っただろ？
自分を信じろ。な？」
「うん！」
それから一夏は簪が寝付くまで傍にいた。

『まったく、貴方は本当に使えるものは使うのね』
「ああしないと俺が疑われるからな」
『あの子はどうするの？貴方の一言で
こっちに来れるんじゃないの？』
「来れるだろうな。でも、前にも言ったように
あいつはこっちに来るべき人間じゃない」
『でも本当はこっちに来てほしいんでしょ？』
「・・・・・」
『図星ね。気づいてない訳じゃないんでしょ？
貴方のその抱いている感情を』
「・・・・さっき気付いたさ。

俺は簪が好きだ。一人の女の子としてな」
『なら』
「それでもあいつは表側（あっち）の人間だ。
俺みたいに裏側（こっち）には来てはいけない」
『そう。貴方がそこまで言うならもう言わないわ。
でも後悔はしないでね？後味悪いから』
「ああ、そのつもりだ。あいつらを潰すためなら
俺は何だってやってやる。
使えるものは使い、潰すものはすべて潰す」

もう後戻りはできない。
最後に残るのは喜びか、悲しみか。
それはこの先に分かること。

第二十三話　After the accident（後書き）

こんばんわ、ケンです。
如何でしたか？
一夏は今回の話で自分の想いに気付きましたが
果たしてそれは成立するのでしょうか？
それでは、さよなら～

第二十四話　I love you

一夏は今、簪とデパートにいた。
「ねえ、一夏どう？」
「あ、ああ可愛い」
一夏は顔を赤くしながら言った。
〜俺何でこんな所にいるんだっけ？
思い出せ、思い出せ。あれは確か・・・〜
それは襲撃事件も一旦は終息し
ほかのメンバーも退院した頃の事。

一夏は部屋で休日タイムを満喫していた。
といっても今はとっくに夕方を過ぎているのだが・・・
〜あ〜土曜日は午前中までで良かったぜ。
お陰で半日休み放題。翌日は一日休み。
最高だーーーーー！！！〜
『ニート道まっしぐらね』
ニートの考えをしていると
突然ドアがノックされた。
「勝手に入ってどうぞ〜」
「お、お邪魔しま〜す」
入ってきたのは一夏の想い人でもある簪であった。
「よ、よう簪。どうかしたのか？」
「う、うん。あ、明日そ、そのい、一緒に出かけない？」
「あ、ああ、い、良いぞ」
という事で翌日待ち合わせをして
デパートに行った。
しかし、女の子の買い物を甘く見ていた。
「次はあっちに行こう！一夏！」

「お、おう」
「つぎはあっち！」
「お、おう」
「次はあっち！」
「次」
「次！」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ」
「もう一夏ったら体力ないね」
〜あ、あのな〜荷物持ちながら階段何往復もしてそれで息が荒れないお前の方がすげえよ〜
「ちょ、ちょっと休憩しようぜ」
「ん〜そうだね。少し休憩しようか」
「賛成だ」
それから二人で喫茶店を探して空いている店に入った。
そこは結構レトロな感じで現代っ子には分からないような店だった。
「いらっしゃい。二名ですか？」
「はい」
「こちらへどうぞ」
案内されたのはカウンターだった。
「ご注文は？」
「俺はブラックで」
「私はミルクコーヒーで」
「分かりました」
それからそれぞれ注文したものが出された。
「ねえ一夏」
「何だ？」
「このあと少し付き合ってくれるかな？」
簪の十八番の涙目で上目づかいを繰りだし見つめてきた。

「あ、ああ」
一夏の心臓は簪に聞こえるんじゃない
かというぐらいに鳴り響いていた。
それから代金を払いその店を出て
簪に連れられてある場所に連れていかれた。

「ここは？」
「ここはねよく昔遊んだ公園」
「へ～」
そこには子供たちが元気良く楽しそうに遊んでいた。
「ここにいると嫌な事も少しは忘れられるんだ」
「・・・・・」
「それに勇気も少し貰える」
「勇気？何で？」
「昔ね、今より私は人見知りだったの。
公園でも一人で遊んで家でも一人。
偶にお姉ちゃんとかお母さんが遊んでくれたけど
それも無くなった。でね、ある日ここに来ると、
その日は一人の男の子しかいなかったんだ」
「ふん。それで？」
「でね、その子が帰ろうとした時にポケットから
鍵を落としたんだけど気付かずに行きかけてた。
それを見てた私は届けようかとも思ったんだけど
怖かったから言えなかった」
「・・・・・」
「でもね、急に公園から声が聞こえてきたの」
「どんな？」
「その鍵は男の子にとって大切なものだから
返してあげなさいって。
今、思えば何かの聞き間違いだったと思うけどね」

「それで、勇気を貰えると」
「うん。今も貰ってるよ？」
「は？」
急に簪がこちらを向くと
夕焼けの所為かはたまた恥ずかしくて顔を
赤くしてるのか分からなかったが
トマトの様に真っ赤だった。
「私ね、好きな人がいるんだ」
「！！！！そ、そうか」
「その人はね初めて会った頃は熱血で殻に閉じこもってた
私を出してくれてこの世界の広さを教えてくれて
どれだけ傷ついても立ち上がって皆を護るって
言ってた。でも、今は休憩中みたいなんだ。
でも、私はその人が好き」
「へ、へ～凄いなその人。簪が惚れるぐらいの
男なんだからさぞ強くてカッコいいんだろうな」
「うん。でもその人はすごく鈍感で
頑張り屋さんなんだ」
「・・・・・・」
「もう！これでも気付かないの？」
「何がだ？」
「は～一回しか言わないよ♪一夏！」
「お、おう！」
「大ーーーー好きだよ！！！！！」
「！！！！！」
思わず一夏は後ずさった。
「・・・・い、一日待ってくれ」
「うん、良いよ」
それからは何も話さず部屋の前で分かれた。

〰一夏！大ーーーーー好きだよ！！！！〰
未だに一夏の頭の中でリピートされていた。
その時の簪の笑顔が離れなかった。
〰ファントム、俺はどうすれば〰
『は～また悪い癖』
〰何？〰
『貴方は何かにぶち当たると自分で考えずに
他人に助けを請う。貴方の悪い癖よ？
指示待ち人間て言うのかしら。
ま、ひとまずはあなた自身で考えてみなさいな』
そのままファントムは機能を一時停止した。
「俺自身で考える・・・・・」

第二十四話　I love you（後書き）

こんばんわっす！
ケンです。
如何でしたか？
果たして一夏は簪の告白にどの様な返事をするのか？
お楽しみに～

第二十五話　ばれるまでは幸せに

一夏は自室で横になりながら考えていた。
〜一夏！だーーーい好きだよ！！〜
未だに頭の中で簪のあの告白と笑顔がリピートされていた。
「俺はどう返事すれば良いんだ」
一夏は考えていた。
自分は簪が好きなのはもう気づいている。
しかし、これからの事を考えると簪に
迷惑がかかる。
〜俺の目的はあいつらをぶっ潰すこと。でも簪は違う〜
一夏は葛藤していた。
簪の告白を受け入れれば幸せにはなるが
その分行動が制限され、ばれる確率も大幅に上がる。
しかし、一夏の中では
簪の告白を受け入れないという
選択肢は何故か思い浮かばなかった。
〜でも俺はあいつらを潰さなければいけない。
一体どうすれば良いんだ？〜
そのまま考えに考え抜き
一つの回答が見つかった。
それは・・・・・・

翌日〜
一夏は珍しく早起きをして
簪を昨日の公園に呼びだしていた。
「おはよ、一夏」
「ああ、おはよ。悪いな
こんな朝早くに呼びだしたりして」

「ううん。別に良いよ。一夏の頼みだし」
そう言って簪は昨日とおなじ笑顔になった。
「あ、ああ。ありがとうな。
それで昨日の返事なんだが
いいか？」
「う、うん」
さっきまで笑顔だった簪の顔が
その言葉を聞くと途端に
不安そうな顔になった。
「簪」
「うん」
「お、俺も好きだ！」
一夏は顔を真っ赤にしながら大声で叫んだ。
「ほ、本当？」
「ああ！」
すると急に簪が一夏に抱きついてきた。
「嬉しい！一夏大好きだよ！」
「俺もだ！」
しかし一夏はもう一つ考えていた。
〜簪・・・ごめんな。俺はお前を利用させてもらう。
目的を達成する為に〜
一夏は簪を利用する事にした。
己の目的を達成する為に。
「簪・・・・」
「な・・むぐ！」
簪が上を向いた瞬間、一夏の顔がドアップで
目の前に映し出されていた。
〜もう、ずるいよ一夏〜
そのまま簪は一夏を身を任せ目をつむり
その初めてのキスを堪能していた。

「悪い。急だったけど」
「いいよ。でも一夏」
「ん、何だ？」
「雰囲気が足りないかな？」
「はは！そうだな」
「だからもう一回して？」
簪は上目づかいで一夏に頼んだ。
〜そんな目で見られたら断れないのを知ってる癖によ〜
「ああ、いいぜ」
そして二人はもう一度キスをした。

「ふふふ」
「どうかしたのか？簪」
二人は手を繋ぎながら学園までの道のりを歩いていた。
「こんなに嬉しいのは
初めてだからつい顔が緩んじゃうの」
簪は嬉しそうに顔を緩めながら言った。
「そうか」
一夏も嬉しそうに笑いながら言った。
しかし一夏の顔は嬉しさ
半分悲しさ半分といった顔だった。
〜本当にこの選択で良かったのか？
確かに簪は嬉しそうに笑っているけど
俺の事が知られたらこいつは・・・・
それでも俺はこいつの笑顔が見たい！
例えこいつに嫌われたとしても
俺はその時までこいつを幸せにする！〜
一夏は心の中で決意し簪の手を強く握った。

遂に繋がった二人の想い。
しかし少年の本当の姿を少女を
知ったとき本当に少女は
今の気持ちのままいられるのだろうか？

第二十五話　ばれるまでは幸せに（後書き）

こんばんわ～ケンです。
いや～遅れてすみません。本当は朝にしようかと思ってたんですが
寝坊してしまいまして。
如何でしたか？
遂に繋がった二人の想い。
しかし、それはほんの短い
幸せにすぎないのでしょうか？
それでは～

第二十六話　Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｓｔａｒｔ

結局あの後は就寝時間まで一緒にいた。
今までの面白かった話をしゃべったりこれからどこ行くとか
そして就寝時間になるとキスをして部屋まで送っていった。
部屋に帰ると電話が入っていた。
「もしもし」
『こんばんわ。寝てたかしら？』
「いや、寝ていないがどうかしたのか？」
『ええ、まあね。貴方は後悔していないのよね？』
「！！！！！何でそれを？」
『お姉さんには分かるのよ。ま、声を聞いているあたり
後悔はなさそうでいいけどね。それで本題に入るわよ』
「ああ、言ってくれ」
一夏の顔つきが真剣なものになった。
『実は前に貴方が暴れた日にね、エムに頼んで学園の
情報をあさっていたの。そしたら面白い物が見つかったわ』
「面白いもの？」
『ええ、学園はコアを持っているわ。それも複数ね』
「・・・・そう言う意味か」
『心当たりがあるみたいね』
「ああ、そいつは恐らく一学期にあった最初のトーナメントの時の
襲撃してきた奴のコア、それと十月ぐらいにあった
タッグトーナメントの時のコアだろう」
『そこまでは知らないけど、貴方に任務を与えるわ』
「内容は？」
『学園に隠されているコアを
全て強奪してきて頂戴。
決行はそっちに任せるわ』

「分かった」
『健闘を祈るわ』
一夏が電話を切るとドアがノックされた。
{こんな時間に誰だ?}
「は～い。どうぞ～」
「お邪魔しま～す」
来客者は一夏の彼女の簪だった。
「どうかしたのか?忘れものか?」
「ううん。まだ、一緒にいたいなって。駄目?」
簪は上目づかいを使って一夏を見つめてきた。
「はは!良いよ。俺は大歓迎だぜ!」
「きゃ!」
一夏は簪を急に自分の膝に座らせ
後ろから抱きしめる形となった。
「い、一夏?」
「ん?何だ?嫌か?」
「べ、別に嫌とは言ってない・・・・」
「はは!よろしい」
「何かあった?一夏」
「何でだ?」
「いやなんとなくそんな気がして」
「何にも無いよ」
「そう・・・・」
結局、そのまま一緒にいて二人して寝てしまい
寮長さんにばれかけたとか。

数日後～
生徒も寝静まった深夜0時、一夏は準備をしていた。
「さてと、やるかな?ファントム」

『ええ、スコールから送られてきたデータにはコアは
学園の地下特別区画にあるらしいわ。
後、そこに入るパスもあるわよ』
「よし、なら行くか」
『ええ』
一夏は部屋を出るとファントムの案内をもとに
目的地へと向かって行った。

『もうそろそろ仮面を出した方がいいわよ』
「ああ」
一夏が顔に手をやると炎が集まっていき
仮面を形成した。
『さあ、行きましょ。ファントム』
『ああ』
一夏は送られてきたパスを使い地価と特別区画へと入っていった。
『へ～ここが特別区画か～』
そこには様々な国からの連絡や生徒たちの
個人情報、そしてゴーレムもそこに保管されていた。
『じゃ、行こうかしら?ファントム』
『ええ』

監視室～
「ん?」
「どうかしたの?」
監視室には二人の宿直がおり監視をしていた。
「いや、今誰か人影が見えたような」
「まさか～今、夜中よ?こんな時間に入ると思う?」
「い、いやでも記録(ログ)には入った記録があるし」
「あら、本当だ。怪しいわね。
あたしが一応確認に行ってみるわ」

「一人で大丈夫？あそこ出るって噂だよ？」
「大丈夫！あたし非科学的な事は信じないから？」
そう言い行ってしまった。
「大丈夫かな～」

「とは言ってみたものの結構怖いわね」
そこは真っ暗で等間隔にある電球だけが
光を発していた。
すると後ろで何かが落ちたような音がした。
「ひ！！・・・って何だ。黒い羽か～
あ～ビックリした。・・・・・・・！！！！」
ようやく気がついたが遅かった。
『ｓｅｅ　ｙｏｕ．』
後ろから黒い翼を出したゼロが教員の
首筋に手刀を入れ意識を奪った。
『ふふふ、良き眠りを』

ゼロは目的地へと再び足を進めた。

第二十六話　Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｓｔａｒｔ（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
それでは、さよなら～

第二十七話　身近な人に恨まれた事あるかしら？

『さ～てと、どこかしらね～？』
ゼロは迷路のように入り組んだ通路を
歩き、コアの保管場所へと向かっていた。
『どう？ファントム』
『そこを右に曲がって１００M直進すれば保管場所よ』
『ああ、ここね』
ゼロの前に大きな扉が見えた。
それはエネルギー状の牢屋のようなもので囲んでおり
素手で触れると焼き切るような仕組みだった。
『ここにしては強固なセキュリティーね。
ま、私には無意味だけどね』
そう言い黒い炎を出し、一気に焼き切った。
『ゼロ。今、非常事態信号が送られたわよ』
『分かってるわ。すぐに終わらせる』

「織斑先生！」
「どうした？山田君、そんなに息を荒くして。
今は夜中だぞ？」
「そうですが、非常事態です！」
「何？どういう意味だ！？」
「ＩＳ学園の地下特別区画に侵入者です！！」
「な、何だと！？」
「早くこちらに！！」

『は～憂鬱。まさしくゼロの憂鬱ね』
『ほざく暇があればこの状況をどうにかしろ』

ゼロは今、数人のＩＳを展開した教師に囲まれていた。
「すぐさま、腕を頭の後ろに持って膝をつきなさい！！」
「こんなとこにどうやって入ったんだか」
『は～分かったわよ。やります、やります・・・なんて言うかしら！？』
ゼロが地面を強く蹴るとともに周りを
黒い炎が包み込み教員は一人残らず
飲み込まれた。
「な、何なのよ！？この炎は！！」
「消えないし！それにエネルギーも吸われてる！？」
そのまま全てのエネルギーを吸収し
ＩＳは全て解除された。
『じゃあね～』
そのままゼロは黒い翼を羽ばたかせ高速で
保管庫へと入りドアを閉めた。
『ふ～これで静かになったわね～
ま、これで少しは時間は稼げるでしょう』
目の前にはコアが数個、
横並びに並べられていた。
『これがコアね～綺麗じゃないわね』
『ずべこべ言わずにさっさと回収するぞ』
『了解』
ゼロはコアを粒子化させて回収した。
『は～帰りたいけど帰らせてくれなさそうね』
そこにはＩＳ用のブレードを持った織斑千冬がいた。
『は～い。ブリュンヒルデ、こんばんわ～』
「流暢に挨拶をしている暇はないんでな。
そのコアは返してもらうぞ」
『それは困るわ～貴方達が持ってても
使わないでしょ～？それじゃあコアが可哀そう！』

「たわけ。今のコアの絶対数が増えれば
確実にこの世界のパワーバランスは崩れ
争いが起こる」
『そうね。でも、今の世界には変革も必要よ～』
「その為にコアを狙ってきたのか？」
『まあね～』
「それと最後の質問だ。お前、どうやって入った」
『ふふふ、それは貴方達で考えなさい。
ちなみにこの難易度は篠ノ乃束でも解けるかわからないわよ～』
「そうか・・・それでは貴様の口から聞こう！！」
千冬はブレードを片手にゼロを切るべく近づいた。
しかし、ゼロは仮面と炎剣以外は全て直してしまった。
「どういう意味だ？」
『貴方に合わせたの。不公平でしょ？』
「後悔するなよ！」
お互いの剣がぶつかり合った。

「はぁぁ！！」
『・・・』
千冬はブレードを振りかざしながら
ゼロに近づき避けられたらゼロに蹴りを入れようとするが
ゼロもそれを避け、炎剣を千冬に振るが
それを千冬はブレードで防ぐ。
その繰り返し。
「いつまでこうしているつもりだ！？
侵入者！！」
『侵入者って名前じゃないわ。ゼロよ』
「そんな事はどうでも良い！！
そろそろ終わりにするぞ！！」

千冬は終わらせるべくブレードでゼロを
切ろうとしたがゼロが腕で防いだ瞬間粉々に砕けた。
「な！馬鹿な！貴様何をした！？」
『ふふふ、ブレードをよく見てみなさい』
「これは？」
よく見るとブレードに所々黒い炎が見られた。
『それは私のＩＳの能力よ』
「だが先遣隊の報告によるとエネルギーを喰らう
だけだと聞いているが？」
『それだけじゃないわ。この炎は
単純に炎としても使えるの。
ま、全てを燃やしつくすまで消えないけどね』
「いつの間にブレードに着けたんだ？」
『あら、覚えてないかしら？この剣は
炎の剣よ？』
「つまりそれに触れている時点から
燃やし始めていたのか」
『しょう言うこと～じゃあね～』
「このまま逃がすとでも思うか？」
千冬は胸元から銃を出し、ゼロに発砲した。
ゼロはそれをまともに受け倒れた。
「これは対ＩＳ用の銃だ。殺せ無くても
怪我くらいは負わせられる。悪く思うな」

そう言いゼロを捕らえようとした瞬間
炎となって紙一枚を残して消え去った。
「な！馬鹿な！」
慌てて周りに目をやるが既に人の気配はなかった。
千冬は一旦、手紙を読んでみる事にした。

『この手紙を読んでいる頃には私はいないわ。
まだ、私は貴方に剣でも体術でも勝てる要素が
無いから今回は能力を使って逃げさせてもらうわ。
でも、今度会うときは貴方倒すから覚悟しておきなさい。
それと貴方、身近な人に恨まれた事あるかしら?
気をつけてね』

「何なんだ、一体奴は・・・・・」
保管庫には機械の規則的な機械音しか聞こえなかった。

「ふ～疲れた」
『お疲れ様。一夏。コアはどうするの?』
「今度向こう行く時に手渡しで渡すさ。
俺は人を信じていないから」
『それはある意味人間不信よ?ま、疑う事にこしたことはないけど』
「だろ?じゃ、御休み」
『ええ、御休み』

第二十七話　身近な人に恨まれた事あるかしら？（後書き）

こんばんわ～
如何でしたか？
この作品は完全オリジナルだからストーリーを
考えるのが大変です（泣）
それでは、さよなら～

第二十八話　ノックはキチンとしましょう。

とある某所にて～
「ん～やっぱりか～」
ある場所の研究室で一人の女性が
画面を見ながら唸っていた。
「どうかなさったんですか？束さま」
「あ、くーちゃん。いや～実はねこの前
ＩＳ学園の映像を何となくあさってたら面白いものがあってね」
〜あさるというよりハッキングして見たの間違いでは？〜
「面白いものとは？」
「これなんだけどね」
束が見せたのはゼロと学園に候補生たちとの
戦いの模様だった。
「これが何か？」
「実はねこの子のＩＳって白式を
黒くしただけの様に見えるんだよね～」
「つまり織斑殿のＩＳだと？」
「だと思ったんだけどね～単一仕様能力（ワンオフアビリティー）
は全く違うし、それにいっくんは白式が使えなくなったらしいし」
「そうなんですか？」
「うん。ちーちゃんから頼まれてね、送られてきた白式の
データを見たんだけどどこも異常が無かったんだよね～」
「では、コアナンバーを調べてみては？」
「いや～そう思ったんだけど映像だけじゃねえ～
実物に触れば調べられるんだけど。
それにこの子、結構やばいしね～」
「やばいとは？」

「実はね公に公表されてないけどアメリカの
第三世代ＩＳの福音の鐘（シルバリオ・ゴスペル）が
強奪されたんだよね～この子に。しかも一人で」
「軍に単身乗り込み一人でＩＳを強奪するとは
この人は強いですね」
「それにね～この映像にもあるように代表クラスにも
無傷で圧勝しちゃうような強さだからね～」
「どうなさるんですか？」
「そうだね～ひとまずこの子の
情報を集めようかな～手伝ってくれるかな？」
「勿論でございます」
「違うでしょ。いいともーでしょ？」
「い、いいともー」
「可愛い！！」
こうして二人の一日は過ぎ去っていく。

ＩＳ学園～
「あ～涼しいね～」
『そりゃ、お風呂から上がったばかりの
貴方には涼しいとは感じるでしょうけど
普通の人はパンツ一枚で外には出ないわよ？』
「いいだろ。別に」
今の一夏の格好はパンツ一枚に首にタオルを
掛けているだけだった。
しかも今は十一月の半ばに
さしかかろうとする時期だ。
半ばであっても若干肌寒く感じるのが今の時期である。
『それにしてもあの子とはどうなの？』
「簪の事か？」
『ええ』

「順調だよ。今のところばれてないし
疑われてもいない。何もかも順調」
『でも、いつかはこの幸せは崩れるかもしれないわよ?』
「ああ、分かってる」
幸せというものは最初は永遠に続くと
本気で思うものだが最後はあっけなく崩れ去る。
それはトランプのタワーを一気に崩すように。
「それでも俺は簪が好きだ。
この気持ちは止められない」
『それが貴方の正体が彼女に知られたとしても
そう言う風に言えるかしら』
「ああ、言えるさ。俺はその日が来るまで
あいつを幸せにする」
『そう。もう言わないわ。頑張ってね』
「ああ」
するとドアがノックされた。
「入っていい?一夏」
「ああ、良いぞ」
「お邪魔しまって一夏!!」
「ん?」
簪は急に顔を赤くして手で顔を隠した。
「ああ、悪い。パンツ一枚だっけ」
「もう!馬鹿!」
「悪い悪い。すぐに着替えるから」
「もう・・・」
「いいぞ」
「うん」
「で、どうしたんだ?」
「え、えっとね。その・・」
簪は顔を赤くしてモジモジしだした。

「トイレか？」
「バ、バカ！違うよ！」
「だったら何だよ？」
「そ、その今度デートしない？」
「ふぇ？」
一夏は顔を赤くした。
「だ、だから！デ、デートに行こって言ってるの！」
「あ、ああ良いぞ。今度の休みで良いか？」
「う、うん」
「そ、それだけか？」
「い、一緒に寝たいんだけど、良い？」
簪は得意の上目づかいで一夏に頼んだ。
〜その目は禁止だろ〜
「簪・・・」
「んん！！」
チュ、クチュ
部屋に舌と舌がこすれあう音が響いた。
「ふぁ、ん、んや、いちひゃ〜」
一夏が唇を離すと糸のような物が
つうっと伸びていた。
「い、一夏？」
一夏は簪をベッドへと押し倒した。
「きゃ！」
「悪い、もう我慢できない」
「え？え？」
簪は困惑していた。
「お前のその上目づかいはわざとしてんのか？
そそるんだけど」
「そ、そんな。わざとじゃ・・ひゃん！！」
一夏は簪の首筋にキスを一つ落とした。

「だからそんな声とかがそそられるんだよ」
「い、一夏」
二人の唇が徐々に近づき
重なろうとした瞬間・・・
「おりむ～こんばんｗ」
「「・・・・・」」
のほほんさんはその光景を見て一瞬で
何通りものパターンを構成し
そしてもっとも最適な行動パターンを
実行した。それは・・・・
「お、お邪魔しました～」
顔を赤くして逃げる事だった。
「ま、待って！本音！」
簪は少し乱れた服を直して
追って行った。
「ははは・・・そりゃねえよ。
のほほんさん」
『は～馬鹿ね』

第二十八話　ノックはキチンとしましょう。（後書き）

こんにちわ！ケンです。
如何でしたか？
感想もお待ちしております。
それでは～

第二十九話　もういくつ寝るとお正月～

ＩＳ学園～
「では、これで今年度の
終業式を終わります」
たった今、ＩＳ学園の少し早い終業式が終わった。
ちなみに今は十一月最後の日である。
こんなに早いのはそれぞれの候補生が
里帰りする期間を考慮しての事だった。

～あ～終わったな～～
『そうね。あなたと出会ってから早いものね』
～出会ってからどのくらいたった？～
『だいたい１か月弱かしらね』
～そうか。これからも頼む～
『勿論』
「おりむ～」
遠くからのほほんさんがゆっくりと
歩いてるのか走ってるのかわからない
速さでこっちに来た。

「のほほんさんか。どうかしたのか？」
「え、えっと。この前はごめんね。
私、かんちゃんとおりむ～が」
「しっ！あまり言いふらすなよ？」
「どうして？」
「きっと簪のやつ恥ずかしくて
学園生活できなくなるぞ」
「あ～おっけ～」

「じゃあな。よいお年を」
「おりむ～もね～」

そう言い本音は他の友達のところへと去っていった。
「さ～てと俺も帰ろうかね」
帰ろうとする一夏に声がかけられた。
「一夏」
「ん？何か用か？」
「ああ、実はな晦日と大晦日の二日間
皆でパーティーでもと思ってるのだが
一夏はどうだ？」
「悪いがおｒ」
「良いよ。私とお姉ちゃんも予定あいてるし
一夏は強制という事で」
「お、おいちょっと待て！！」
「よし。そうか、そうか！分かった、予定は
こっちに任せてくれ」
そう言い箒は嬉しそうに走っていった。

「簪、俺はお前と」
「分かってる？でも、それはまた別に日に二人っきりで
過ごそうよ。ね？」
「ああ、ん？」
一夏は何かいい匂いがしたので周りの匂いを嗅いでいた。
「どうかしたの？」
「いや、なにか近くで香水の匂いがしたからな。
そういえば簪、お前今、化粧してる？」
「うん。まあ、軽くだけどね。どう？」
「あ、ああ。また違った可愛さが出てる」
「ふふふ。嬉しいな」

「行こうか？」
「うん！」
二人は荷物整理のために部屋に戻っていった。

「ふ～ようやく一年が終わりましたね。先輩」
「ああ、そうだな。だが、今年は襲撃が多すぎる」
「そうですね。トーナメント戦に始まり色々と
非常事態がありましたね」
「ああ、それに先日も侵入されたからな」

「そうですね。どうやって入ったんでしょうか？」
「それもまだ分からん。ここのセキュリティーは
易々と破られるような物ではないんだがな」
「でも、今回の事件で政府から支援金が降りて
さらに強固なセキュリティーが作られるって噂ですよ」

「ああ、そうらしいが不安だな」
「そうですね。でも、もう年が越されるんですから」
「そうだな。山田君はどうするつもりだ？」
「私は実家に帰るつもりです。先輩は？」

「私は家に帰るさ。いつもの通りにな」
「それで一夏君と一緒に過ごすんですね？」
「いや、今年は出来そうにない」
「え？何かあったんですか？」

「実はな…あいつに彼女が出来たみたいなんだ」
「え？そうなんですか？」
「ああ、更識妹が部屋に入るのを何度か見ている」

「あ！もしかして悔しいんですか？
そりゃそうですよね。昔から一緒にいた弟が
恋人が出来、ぐうぇ！！」

千冬は麻耶に強烈なアイアンクローを喰らわした。
「すまない山田君。手が滑った」
「うぅ、痛いです」
麻耶は涙目になっていた。

千冬はふとあの時言われた言葉を思い出した。
『身近な人に恨まれた事はあるかしら？』
〜あれはいったいどういう意味なんだ？
未だに分からん。身近な人か…まさかな〜
一瞬、一夏の顔が出てきたがすぐに振り払った。
「さあ、仕事を再開しようか」
「はい。う〜まだ痛い」

とあるデパートにて。
一夏は今、簪とデパートにデートに来ていた。
目的は簪曰く女の子にしか分からない買い物だという。
「にしても、そんな買い物に俺を呼ぶかね〜」
『良いじゃない。この世界には貴方の様に愛する人がいない可哀想な人だっているのよ？』
〜お前が言うなよ。ま、でもこれはこれで幸せかな？〜

「一夏〜ちょっと来て〜」
「へいへい」
「これとこれどっちがいいかな？」
「どっちも可愛いと思うけど？」

「もう！それじゃ意味ないの！」
「と言われてもね～」
簪が持っていた服は黒い服と白い服だった。
「じゃあ、黒かな」
「黒？似合うかな？」
「似合うさ。簪なら何でも」
「もう！煽てても何も出ないよ？
清算してくるね？」
「ああ」
一夏がベンチに座ると隣に女性が座った。

「羨ましいわね～私もあんな風にデートしたいわね～」
「何の用だスコール」
「あら？もしかしてデートを邪魔されてお怒りかしら？」
「そんな事は良い。要件を言え」
「はいはい。明日いつもの場所に
迎えを置くから来て頂戴」
「何かあったのか？」
「別に～ただ、いつもの通り訓練して、それと定時総会かしらね」
「そんな物があるのかよ」

「まあね、と言っても表の会社のだけどね」
「俺もそれに出るのか？」
「ええ、貴方には仮面をつけてもらって出てもらうわ」
「怪しまれないか？」
「大丈夫よ。エムだってそうしてるんだし」
「そうか、分かった」
「じゃあね。あ、あと」
「何だ？」
「避妊はしなさいね？」

「お、お前!!」
「じゃあね〜」

「逃げ足の速い奴め」
「一夏…」
「おう、簪か。どうか…した…のか?」
目の前には黒いオーラを纏った簪がいた。
「さっきの女の人誰?随分親しそうだったけど」
「だ、大丈夫だ。あいつはただ単に知り合いで」
「本当に?」
「ほんと、ほんと。嘘だったら死んでも良いくらいに本当だ」
「そっか。なら良いや。いこ?」
先程とは変わり、満面の笑みで一夏の腕に抱きついてきた。

「あ〜楽しかった!!」
「俺もだよ、簪」
二人は手を繋ぎ家路についていた。
「ねえ、一夏」
「ん?何だ?」
「クリスマスとイブの二日間泊まっても良いかな?」
「あ、ああ。良いぞ」
「良かった。じゃあね。一夏」
「ああ、じゃあな」
簪は家に入って行った。
一夏はそれを見えなくなるまで眺めていた。
「帰るか、俺も」
一夏も家へと帰って行った。

もうすぐ、楽しい行事。

第二十九話　もういくつ寝るとお正月～（後書き）

おはようございます！！ケンです！！
皆さんお久しぶりです！！
ケンは帰ってきました！！
まあ、改変を終わらせてきただけですが。
如何でしたか？
少しの間は日常編が続きそうです。
白黒は一次創作と同じくらい構想を練るのに時間がかかっちゃいますので毎日更新は無理です。すみません。
感想もお待ちしております。
それでは！！！

第三十話　表の総会と裏の総会

翌日、一夏はいつもの場所に行き迎えに拾われ
会社へと着いた。

「ああ、いらっしゃい。ゼロ」
いつもの通り裏口から入るとスーツ姿のスコールが待っていた。
「ああ、それでどうすれば良いんだ？」
「ひとまず正装に着替えて頂戴。服は突き当たりの部屋に置いてあるから」
「ああ、分かった」
そう言われ一夏は言われた部屋に入るとそこには・・・
「……」
「あ？」
下着姿のエムとオータムがいた。
「お、お前ら！！」
「「出てけ！！！！！！」」
一夏は色々な物を投げつけられ一時退却した。

「貴様は変態なのか？」
「断じて違う！！俺はただ単にスコールに言われて入っただけだ！！」
「そ、それでも見たことには変わりはねえだろうがよ！！ああ！？」
エムはそれ程、気にしていないのかあまり怒ってはいないが
顔が少し赤かった。
それに対しオータムはかなり顔を赤くして怒鳴り散らしていた。
「そ、それはそうだが、俺に罪は無い！！！！！悪いのはあいつだ！！！！！」

一夏が指をさした方向には腹を抱えて笑っているスコールがいた。
「ふくくくく！！！はは！！」
「笑いすぎだ！！スコール！！」
「だ、だってあんなにもバカ正直に
言われた部屋に入るなんて！！ふくくく！！」
「「スコール！！！」」
「ごめんなさいね？じゃあ行こうかしら？」

「皆様、大変ながらお待たせいたしました。
これよりわが社の定時総会を行います」
会場には多くの社員が緊張しているような趣で臨んでいた。
「それでは、社長にマイクを変わります。社長、お願いします」
「ええ。皆、おはよう」
「「「おはようございます！！」」」
「これから定時総会を行うわ。まずは会社の実績を
話すから配布した物の３pを開いて頂戴」
会場に紙をこするような音が木霊した。
「まずは今月の実績だけど皆の頑張りもあって
黒字経営よ。これには感謝するわ。
でも、先月と比べると少し落ちているわね。
ま、このぐらいなら頑張って取り戻せる程度だからいいわ。
次に」

〜あれが社長か〜
〜あれは所詮、表だ〜
〜あいつらも表なのか？〜
〜何人かは裏の奴だが全体的にみると表だ〜
〜ところで表の会社は何してるんだよ？〜
〜そんな事も知らなかったのかよ！？〜

{{ああ、悪いか？}}
{{表はＩＳの武装開発及び第３世代機の開発だ}}
{{あっそ。それよりも、俺たちは何でこんな事をしてんだ？}}
一夏たちは何故か清掃のおばちゃんの格好をして
掃除をしていた。

{{見て分からないか？掃除だ}}
{{俺はてっきり会場でスタンバイしてるのかと思ったら
ここに来て、いきなり掃除かよ}}
{{言っただろう。これは表だ。今日は裏の総会もあるんだ}}
{{そのために来たと}}
{{そうだ}}
{{ところでスコールは？}}
{{あいつなら裏の総会の準備だ。色々と忙しいんだ。あいつも}}
{{あっそ。それでいつから何だよ？その総会は}}
{{表が終わり次第だ}}
エムは小声で一夏に話しながらも掃除をしていた。

それから３０分ほど経ち表の総会が終わり
社員が全員、持ち場についたのを見計らって
総会が行われる部屋に案内された。

「ここからは仮面をつけていろ。お前も私も
顔が割れればまずいからな」
「分かった」
ゼロは顔に手を置き仮面を出した。
『これでいいかしら？』
「何回見ても本当にお前か疑うな」
『あら、嬉しいわねオータム』

「褒めた気はねえんだが」
「おい、そろそろ入るぞ」
三人は部屋に入るとそこには
スコールと老人や若い青年から女性まで
幅広い年齢層の人物がいた。

「では、これより総会を行いたいと思います」
「待て。その前にそいつは誰じゃ」
白いひげを蓄え、杖をついた老人が声を上げた。
「失礼致しました。こちらの人物はつい先月新しく
入った幹部です」
『ご紹介にありましたゼロです。このような
無礼な格好ではありますがお許しください』
「ほう。若いのに礼儀正しいとわな。まだ、こんな
女性がいたとわな」
〔本当に気づいてねえのかよ〕
「では始めさせて頂きます。まずは報告からですが
先月、アメリカの第三世代ＩＳの福音（シルバリオ・ゴスペル）の鐘を強奪致しました」
会場から驚いたような声が聞こえてきた。

「そ、それは本当か！？」
「本当でございます」
「その機体は今はどうしておる」
「今は地下保管庫に厳重に保管しております」
そしていくつか報告をした後、総会は閉会した。

「あ～疲れた」
一夏は仮面を戻し別室で休憩していた。
「お疲れね。どうだったかしら？初めての総会は」

「ん。ああ、あいつらは何なんだ？」
「あの人たちは支援者よ」
「支援者？別に表の会社があるんだから
支援なんかいらねえんじゃないのか？」
「それがそう言う訳にはいかないのよ。
お金があってもＩＳの知識がなければ新たなＩＳ開発は
出来ないでしょ？それで、彼らには研究者などの面で
支援してもらってるのよ。他にも支援している面はあるけどね」
「ああ、そういう事」
「ええ。それで今日はどうするのかしら？」

「ああ、今日はこのまま帰る。まだ夕方だしな」
「そう。じゃあ、車を出させるわ」
「ああ、頼む」

一夏は車で送ってもらった後、家に帰ると先に千冬がいた。
「遅かったな、一夏」
〜何でいるんだよ〜
「まあね。で、何してるの？」
「ああ、もう年の瀬だろう？今年は家で
仕事を済ませようかと思ってるんだ」
〜毎年の如く向こうでしろよ！！向こうで！！〜
「ふ〜ん。それで？」
「いや、それだけだ。ああ、それと」
「何？」
「最近、あいつらと特訓をしてないようじゃないか」
「そうだけど。何か？」
「まだお前はあいつらの中では断トツで最下位、
何だから少しでも奴らと、特訓をしてもらえばどうだ？」
「白式が使えないのに？」

「そうだとしても訓練機がある。それを使えばいい。
最近、篠之ノは遅くまで特訓をしているらしいぞ？
あいつも勝ち始めてるからな。負けないようにしないと
お前のよく言ってる事は出来ないぞ？」

「はいはい。分かりました」
「あと、座学の方もしっかりやれよ？
今回の成績は最下位だったんだろ？」
〜うるさいな！！何も知らない素人が成績欠点じゃなかった
だけでも凄い事なんじゃないのか！？
あんたらみたいな早い時期から勉強してる奴と一緒にすんなよ！！〜

「はいはい、分かりました。来年はもっと頑張ります」
そう言い残し一夏は晩御飯の準備に取り掛かった。
一夏が去った千冬の部屋で千冬は一人考えていた。

〜最近、あいつが余所余所しくなったのは気のせいだろうか？
私の事を千冬姉と呼ばなくなったし
貴方やあんたと呼ばれる方が多くなった気がするな…
考え過ぎだろうか？〜
千冬は一旦は心配したがそれを振り払い仕事に意識を戻した。

第三十話　表の総会と裏の総会（後書き）

こんばんわ。ケンです！！
一次創作の方に時間を取られて白黒が遅れてしまいました！！
すみません。
如何でしたか？
日常編で面白くないと思いますが少しの間
ご勘弁ください。
それでは、さよなら。

第三十一話　期限付きの同棲生活の始まり始まり

「ふぁぁぁぁ～眠い」
『そりゃ、昨日というか時間的には今日だけれど
あれだけ、ネットしていれば眠くもなるわよ』
「そうだけど、久しぶりにしたからつい、夢中になってさ」
実は、昨日一夏は家に一台だけある
パソコンを久しぶりに３０分くらいしようかと思い
電源をつけたのは良いが何せ今まで学園にいた為
更新されている量が多かった為、それを確認していたら
見事に寝不足に陥ってしまった。
『それで、めんどくさがりになった貴方が
今日は何で外に出かけてるのかしら？』
「ああ、少し買いたい物が増えて
きたから今のうちに買っておこうかと」
『買うものって？』

「文房具だったり年末に大掃除する為の
掃除用具だったりだ」
『めんどくさがりの貴方が大掃除？』
「さすがに年末は大掃除しておかないと
気分が優れなくなるからな」
『そう』
そうして歩いていると後ろから声がかけられた。
「よう！一夏じゃねえか！？」
「あ？」
後ろを見ると五反田弾と御手洗　数馬がいた。
〜また、微妙な時に〜
「久しぶりじゃねえか！！最近、連絡くれないから寂しいぞ、この

野郎！！」
「それで、どうだ？女の園は？ん？」
〜うざいな。自然に振り切るか〜
「ああ、久しぶりだな。こっちも忙しいんだよ」
一夏は笑顔で返したがその心中は笑っていなかった。

「なあ、これから俺たちでどっか行かないか？」
「あ、良いね！！久しぶりに一夏もいる事だし」
「お、お〜い」
「お前も良いよな！？」
「久しぶりにぱ〜っと歌おうぜ！？」
「あ、ああ」
「よし！なら、どこに行く！？」
「この近くにカラオケがあるからそこに行こうぜ！！」
〜あ〜、俺何でこんな奴らと意気投合したんだろう〜
『それはあなたの性格が以前とは真逆に変わったからよ』
〜あ〜憂鬱だ〜
一夏は二人にひっぱられるようにカラオケについて行った。

「よっしゃーーー！！！歌おうぜーー！！」
「いえぇぇぇぇーー！！！」
「いえぇぇぇ」
一夏は棒読みで反応した。
「何だなんだ？テンション低いぜ？女の園でハーレム築いてる奴は女遊びの方が得意か〜」
「良いな〜俺と変わってくれよ！！」
〜は〜こいつらうぜえ〜
「変れんなら変わりたいね」
「ま、良いや。今日は歌うぞーー！！」

「おーーー！！！」
「お～」

結局、あれから何時間も歌を聞かされて
解放されたのはお昼の3時頃だった。
「あ～、あれから3時間もよく俺、我慢できたよな」
『そうね、貴方の性格からしたらよく出来たわね』
それから、すぐに一夏は必要な物を買い
喫茶店に入った。
「いらっしゃいませ。お一人様ですか？」
「はい」
「それでは、こちらにどうぞ」
案内された席は一人席で結構広々としていた。
「ご注文の方が決まりましたらお呼びください」
「じゃあ、ブラックコーヒーで」
「ミルクはいかがいたしましょうか？」
「結構です」
「分かりました。少しお待ちください」
数分後にコーヒーが運ばれてきた。

「ふ～疲れた」
『そうね。最近、結構神経使う任務が多かったからいい羽休めじゃない』
〜と言っても任務したのは2，3個だけどな〜
『それでも、疲れは溜まるものだったんでしょ？』
〜まあな〜
一夏はコーヒーを飲み終わると勘定を済ませ
店から出た。
「んじゃ、帰るかな」

一夏は荷物を持ち晩御飯の準備の為に家へと帰った。

「あ～眠い。早く寝よ……ん？」

一夏は家の鍵をだし開けようとしたがドアが開いていた。

｛家出るときには鍵は閉めた千冬（あいつ）は今は出かけて晩にしか帰らないし、今はまだ１６時前……なんで開いてるんだ｝

一夏は警戒しながら家の中に入ると玄関に置いていたゴミ袋が無くなっていた。

｛置いておいたゴミ袋が無くなってる。…空き巣なのか？｝

さらに進んでいくと居間の明かりがついていることに気付いた。

念のため一夏は、いつでも黒幻（ブラックファントム）を起動できるようにして、居間に入った。そこにいたのは……

「あ、一夏。おかえり」

彼女の簪だった。

「お前かよ！！」

「？？？？」

簪は不思議そうに首をかしげた。

「い、いや何もない。ところでなんでここに簪が？」

「ん～会いたかったからじゃダメかな？」
「い、いや別にいい」
簪は上目づかいで一夏の顔を覗き込んだ。
〔可愛すぎるだろ。……理性保つよな〕
「家には何日か帰らないって言ってあるから大丈夫だよ」
「そうか、なら良いな……ちょっと待て」
「ん？何？」
「今なんて言った？」
「家には当分帰らないって」
「どこに帰るんだ？」
「一夏の家だけど」
「つまり泊まると」
「うん。さっきからそう言ってるでしょ？」
よく見ると簪の隣には大きなカバンが置いてあった。

「ダメなの？」
「ダメじゃないけどさ、事前に連絡ぐらいはしてくれよ」
「だって一夏、携帯持ってないでしょ？」
「……家に電話」
「何回もしたけど出なかったよ？」
一夏は慌てて留守電確認をすると確かに留守電が何個もあった。
「ま、いっか。今から晩御飯作るけど何が良い？」
「一夏の作るものなら何でも」
「了解」
こうして二人の期限付きの同棲が決まった。

第三十一話　期限付きの同棲生活の始まり始まり（後書き）

おはよございます！！ケンです！！
如何でしたか？
更新遅れてすみません！！
テストも近いのでしばらくの間は停止いたします！！
それでは！！

第三十二話　非リア充の人の中には美少女と付き合ってるって妄想するよね。

一夏と簪の期限付き同棲生活の初日…
「ねえ、一夏～」
「ん～」
二人は居間でテレビを見ながらグダグダしていた。
簪は一夏の肩に頭を乗せ、手を繋いでいた。
「後で、今日の晩御飯の買い物に行こうか」
「ああ、そうだな。簪は何食べたい？」
「ん～…一夏が作ったものなら何でもいいよ」
「そ、そっか」
一夏は顔を赤くして、目を背けた。
「そういえば、織斑先生は？」
「あの人なら、当分は帰ってこないらしい」
「どうして？」
「さあ？仕事が残ってたか、政府との秘密の会談か、同僚と忘年会じゃねえの？」
「他の三つは分かるけど最後の忘年会は速過ぎない？」
「ま、別にいいだろ。それよりもさあ」
「な～に？」
「なんで俺は、特撮番組を見てんだ？」
今、一夏は簪に面白いので一緒に見ようと誘われ、てっきりドラマかと思ったがまさかの、特撮番組、しかも、仮面ライダーだった。

「面白いでしょ？特にさっきのサバ〇ブになるとことか、さっき見てた
オー〇のタ〇〇ドルとか、ファイ〇のブラ〇ターとか、あと」
「分かった、分かった。その話はさっき聞いた」

「ん～それじゃ～今度は」
「まだ見るのかよ」
「うん、一夏と一緒に見ようと思って家に溜めてあったＤＶＤを全部持ってきたの」
カバンを見てみると確かに大量のＤＶＤが鞄一つを埋めるくらいに入ってあった。
（だから、カバン二つも持って来たのかよ）
「それじゃあ～今度は」
「買い物に行こう」
「え？買い物？」
「ああ、今日の晩御飯の買い物。嫌か？」
「ううん。行こう！！」
簪は目をキラキラさせて言った。

「準備できたか～」
「まだ～」
「まだって、もうあれから１５分ぐらいたつぞ。なんで、女性は準備にこんなにかかるんだ？」
「お待たせ！！」
「んじゃ、行くか」
「うん！！」
簪と一夏は手を繋ぎ近くのスーパーに向かった。

「今日はこれが安いから、これにして、後は」
「い、一夏？」
「この肉は分量から見るとお得だけど値段から見れば、大損だからこっちに変えて」
スーパーに入って品定めをする一夏の目はまさしく、狩人のそれだ

った。
その光景に若干、簪は引いていた。
「一夏!!」
「ん?どうかしたか?」
「さっきから呼んでたのに、もう知らない!!
外で待ってるから!!」
「え?ちょ、おい」
簪は一夏の言葉を無視して外に向かった。
〈怒らせちまったな…早く終わらせるか〉
一夏は品定めの速さを数倍に上げて行った。
周りの主婦が若干白い目で見るのも気付かずに。

「は〜」
一方、外に置いてある椅子に座った簪は深いため息をついた。
〈なに、嫉妬してんだろ、私〉
実は先程、簪は一夏の気が食材に向いていたので
イライラしてしまったのであった。
〈謝らないとね〉
「ね〜彼女〜暇?」
「???」
視線を上に向けるとチャラチャラした男性が三人いた。
真昼間ならまだ、分かるが今は夕方でさらに、ここはスーパーである。
周りの視線もあるのにも拘らずナンパをしてきていた。
「すみません、彼氏を待ってるので」
「え〜良いじゃ〜ん。彼女を一人にするような
彼氏、ほっといて俺たちと遊ぼうぜ」
「嫌です」
「あ、もしかして照れてる?」

「俗にいうツンデレって奴か～」
勘違いにも程がある。
「違います。彼氏を待ってるので」
簪がその場を離れようとした時、腕を掴まれた。
「ちょっと！！離してください！！」
「うっせえな。さっさと来いつってんだろ！！！」
先程の温和な感じとは違い、明らかに怒っていた。
「おい、お前らも手伝えよ！！」
「へいへい」
目の前には車があり一人がドアを開けて待っていた。
「い、嫌！！」
「うっせえぞ！！」
簪が叫ぶのも構わず車に押し込もうとする。
〜一夏、助けて！！〜
「うぎゃあ！！」
「「！！！！」」
「え？」
車で待っていた人物が吹き飛ばされた。
「お、おい大丈夫かよ！？」
「おい、お前ら」
「「「！！！！」」」
「一体、誰の彼女を連れ込もうとしてんだ？こら」
「一夏！！」
「くそ！！」
驚いていた隙に簪は逃げだし、一夏に抱きついた。
「待ってろ。すぐに終わるから」
「うん」

「さ～てと、どうしようかな～？」
一夏は笑っていたがその顔はひどく冷たく、黒いものだった。
「くそが！！」
一人が殴りかかってきたが一夏はそれを避けて顎を殴った。
「ぐぎゃ！！」
「顎が外れたかな～？」
「ひぃ！！」
残りの奴も逃げ出そうとするが一夏は足をかけてこかした。

「わ、悪かった。ゆ、許してくれ」
「んな訳ねえだろ？ぶ・ち・こ・ろ・し・か・く・て・て・い・」
「あぎゃぁぁぁぁ！！！」
その後、一夏にボコボコにされた奴は泣きじゃくりながら、逃げていった。

「簪」
「ふぇ？」
部屋に入るや否や一夏は簪を抱きしめた。
「怖かっただろ？ごめんな、俺の所為で怖がらせてしまって」
「一夏～」
簪は体を震えさせながら一夏の胸で泣いた。

「ん…あれ？私、寝ちゃってたんだ」
あれから簪は泣きつかれてしまい、そのまま眠ったらしい。
「あ、いい匂い」
簪は匂いにつられるように居間に行くとそこには、料理が並べられていた。
「す、凄い」

「ああ、起きたか、簪」
「うん。これ全部一夏が作ったの？」
「ああ、まあな」
テーブルの上には、ハンバーグにスープ、デザートにはコーヒープリンまでも置かれていた。
「これ全部手作り！？」
「ああ、まあな。スープはインスタントに少し手を加えただけだけど」
「それでも凄いよ！！私だってこんなの作れないよ」
「ま、良いんじゃね？食べようぜ」
「うん！！」
二人は席についた。
「「いただきます」」
まず簪が手を着けたのは、ハンバーグだった。
お箸でほぐすと中から肉汁が溢れ出して来た。
「おいしそう」
一口サイズに切って、口に入れると中で肉汁が広がり口全体にうまみが広がっていった。

「美味しいか？」
「うん！！美味しいよ！！」
「はは！！良かった。ハンバーグ作ったの初めてだったからな」
「そうなの！？凄い…あ、そうだ！！」
「ん？」
「一夏、あーん」
「は？？？」
簪は満面の笑みでこちらにハンバーグを向けてきた。
「前からしたいなーって思ってたの。ほら、あーん」
「あ、あーん」

一夏は頬を少し赤くしながら食べた。

その後も、食べさしあい、簪が食器を洗うという事なので
一夏は風呂を溜めていた。
「幸せだな～、ほんと、簪といるとあの事を忘れるくらいに」
『まさか、本当に忘れてないでしょうね』
「当たり前だろ。簪とあいつらは別だ。あいつらは
思い出すだけでも腹が立つさ」
『なら良いけど、近いうちにあの子を裏切るかもしれないのよ?
それだけは分かっていてね』
「ああ」

台所に行くと簪が食器を洗っていた。
一夏は簪を後ろから抱き締めた。
「い、一夏?」
「ん～な～に～?」
「え、えっと」
「嫌か?」
「嫌じゃない…」
「なら良い。簪って良い匂いがするな～」
一夏は簪の首筋に鼻を近づけ匂いを嗅いだ。
「ちょ!んん!!ひゃ!まだ、終わって」
「もう終わってる。食器を拭くことなんか
いつでも良い」
一夏は簪がつけていたエプロンを脱がし
顔をこちらに向けさしてキスをした。
それも、深い方の。

ちゅ、くちゅ、ちゅ、ちゅ、くちゅ。
辺りに舌と舌が絡み合う音が響いた。
「ん、はぁ～いちひゃ～」
「簪」
さらに一夏は手を腰にまわし撫で始めた。
「んん！待って」
「どうした？」
「お、お風呂にはいるまで待って」
「無理、待てない」
「待たないと嫌いになっちゃうよ？」
「…分かった」
どうにかして一夏を離した簪は慌てて部屋に戻った。
〜まだ、心臓バクバクしてる〜
簪は顔を真っ赤にしてへたり込んだ。
続く……

第三十二話　非リア充の人の中には美少女と付き合ってるって妄想するよね。

お久しぶりでございます！！
ケンは帰ってきました！！
テストの方も落ち着いてきており残り1日となりましたので
今日、更新致しました！！
如何でしたか？
感想もお待ちしております！！
それでは！！

第三十三話　レザイア

一夏は湯船につかりながら考え込んでいた。
〜あ〜なんであの時、我慢できなかったのかね〜〜
あの時とは簪に後ろから抱きついたとき、我慢できなくなって襲いかけてしまった事だ。
〜これも男の性かね〜〜
そんな事を思いながら湯船から上がりタオルで全身をふきいつもなら、パンツ1枚で部屋をウロチョロするのだが今日は、簪がいる為、洗面所で寝間着に着換える事にした。
「お〜い、簪〜風呂上がったぞ〜」
「あ、うん。じゃあ、入らせてもらうね」
簪は若干、顔を赤くしながら洗面所に入りドアを閉めた。
〜ドア開けたら簪が着替えてんだよな……それは男として駄目だろ〜
一瞬、ドアノブに手を置きかけたがすぐにドアから離れ自室に入った。

「ふ〜いいお湯」
簪は肩まで湯船につかりそう呟いた。
姉譲りの青い髪は先程洗い終わり、顔についたりもした。
「髪の毛も伸びてきたな〜今回は少し伸ばしてみようかな？でも、長すぎるのも邪魔になるし、もう少し延ばしてみようか」
髪の毛に意識を移していたが今度は自分の胸に目を下ろした。
「……一夏ってやっぱり大きい方が好きなのかな？男の人はよく大きい方が好きだって言うし。本音は良いな〜私よりも2カップも違うし」
幼いころから近くにいた、幼馴染兼メイドさんの本音は何を食べてそこまで成長したかは知らないが簪とは胸のサイズが2カップも違っていた。

「お姉ちゃんは大きいのになんで私だけ小さいんだろう…
まあ、いいや。一夏が傍にいてくれたらどうでも良くなっちゃった」
簪は湯船から上がり寝間着に着がえた。

その頃、一夏はスコールからの電話を受けていた。
「何か用か、こんな晩に」
『ん、もう！彼女とのイチャイチャエロスティックな
同棲生活を邪魔されたからってそんな怒らないでよ～』
「……切るぞ」
『あーー！！ちょっと待って！！切らないでよ～』
「早く要件をいえ」
『せっかちね～ま、いいわ。まだ信用性が無い情報だけどアメリカ
とイスラエルが
共同である武器を開発したらしいわ』
「まあ、あれだけ襲撃されたら開発もする。それでその武器とは？」
『ええ、その武器は対ＩＳ用に開発された物でＩＳの機能を
一定時間だけ完全にシャットアウトするらしいわ』
「また厄介な物を作りやがって。で？そいつでも破壊するのか？」
『分かってるじゃない。まだ、信用性はないけどこれから
調査を進めて行くわ。それで、もしもあった場合は貴方とエムと一
緒に
破壊しに言って頂戴』
「了解した。その任務はいつごろになる」
『分からないわね。年が明けてからじゃないかしら』
「そうか、分かった」
『後、今年はもう来なくていいわよ。少しは休憩を入れないとね。
彼女さんに癒してもらいなさい』
「そのつもりだ。もう切るぞ」
『ええ、Ａ　ｇｏｏｄ　ｎｅｗ　ｙｅａｒ｛良いお年を｝』

「ＴＨＥ　ｓａｍｅ　ｔｏ　ｙｏｕ｛貴方もね｝」
一夏が電話を切ったと同時に簪が部屋に入ってきた。

「電話終わった？相手は誰？」
「安心しろ、お前の思ってるような奴じゃないさ」
「ふふ、なら良いや。うりゃ！」
「うぉ！」
簪は一夏に思いっきり抱きついた。
「ふふ、いい匂いがするね」
「そりゃ、風呂入った後だからな」
「ねえ、なんで一夏ってオシャレしないの？」
「俺がか？別に俺がしても無駄だろう」
「一夏、それ大半の男の人を敵に回すような発言だよ？」
「は？なんのこっちゃ」
「ま、良いや。これ以上一夏がかっこよくなっても困るし」
「お、俺がカッコいい？冗談はよしてくれ」
「ほんとだよ？気づいていないと思うけど一夏って結構、女の子から好かれてるんだよ？」
「あんまり実感がないな～」
「ふふ、でも今は一夏は私の物。私は一夏の物だよ」
「簪……大好きだ」
「私もだよ、一夏」
二人は目を閉じ唇を合わせた。

「寝ようか。時間も遅いし」
「ああ、そうしようか。御休み、簪」
「うん、御休み。一夏」
簪は一夏の腕に抱かれて眠りに落ちた。

その頃、スコール達はある研究所を襲っていた。
「援軍要請!!援軍要請!!亡国機業(ファントムタスク)と思われる
二人組が研究所内に侵入!!奴らの目的は!!」
男性が内容を伝える前に爆発が起こり、男性は爆風で飛ばされ意識
を失った。
「エム、こっちは無いわね。そっちはどう?」
『まだ、こちらも見つけてはいない』
「そう。引き続きお願いね」
『分かった』
今、エム達はＩＳ用の武装を開発している研究所を襲っていた。
ここの研究所では、新しい武装が開発できたと情報が入り
初めは交渉で平和的にその設計図を貰おうとしたが
向こうが拒否した為、このような手段になった。
「うぅ」
「ねえ、貴方。ここの研究所にレザイアという武装があるって聞い
たんだけど
どこにあるか知らない?」
レザイアというのは設定した範囲内のＩＳを狂わせる武装である。
例えば右から攻撃が来ているのにも関わらず左に反応を示したり
バグを相手に大量発生させてオーバーヒートを強制的に起こし
無力化するというものだった。
アメリカとイスラエルが開発したという武器をＩＳが使えるように
改良したものだ。こちらはＩＳ用に対して向こうは
人間が使う対ＩＳ用兵器なのである。
「ああ、知っているとも」
「教えてくれないかしら」
「貴様の死に場所だ!!」
「そう…さよなら」
スコールは何のためらいもなく引き金を引き研究員を殺した。
すると、プライベートチャンネルに通信が入ってきた。

『スコール!!聞こえるか!?』
「そんなに大声出さずとも聞こえてるわ、オータム」
『そっちにドイツ軍が向かっている。すぐに脱出した方がいい』
「そう…分かったわ。エムにこの事は？」
『今から伝える』
『その必要はない』
エムがプライベートチャンネルに割り込んできた。
『こっちでレザイアと思わしきものを回収した。そっちに戻る』
「了解。オータムそっちに戻るから指示をお願い」
『任せろ!!』

そしてスコール達が立ち去った数分後にラウラ率いる軍が到着した。
「くそ、遅かったか!!生存者を見つけ次第救助しろ!!」
「「「「Ｖｅｒｓｔ？ｎｄｎｉｓ!!!〜了解!!〜」」」」
隊員たちは四方八方に散らばり生存者の確認を急いだ。
現場は未だに血のにおいと硝煙の様な匂がたちこめており
地面には多数の人だった肉塊があった。
「Ｓｏｒｒｙ ｆ？ｒ ｄｉｅ Ｖｅｒｓｐ？ｔｕｎｇ ｉｎ ｄｅｎ ｋｏｍｍｅｎｄｅｎ．Ｉｃｈ ｒｕｈｅ ｉｎ Ｆｒｉｅｄｅｎ
〜来るのが遅れてすまない。どうか安らかに眠ってください〜」
ラウラはそばにあった遺体の目を閉じさせた。
ラウラは力強くこぶしを握った。
「許さんぞ!!亡国機業(ファントムタスク)!!!」

第三十三話　レザイア（後書き）

Ｇｏｄｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ！　ｅｖｅｒｙｏｎｅ．
英語で始めてみましたケンです！！
如何でしたか？
こんな甘甘な生活してみて～～～
非リア充の僕はやる事は勉強しかないのです。（泣）
如何でしたか？
武装はオリジナルですがおかしなとこがあったら言ってください。
修正いたします。
それでは、今日も張り切っていってらっしゃ～い！！

第三十四話　想いは繋がり任務が始まる

そして、月日は流れクリスマスパーティーの日となった。
天気予報によると今年は雪は降らずに厳しい寒さになるとの事。
そして、厳正な審査の結果、またもや会場が一夏の家になってしまった。
という事なので簪は一旦帰宅し一夏一人で家の大掃除をし
人数分の座布団を用意し暖房を入れたり等、本当に恨んでいるのかと疑いたくなるほど準備に凝っていた。
その事を黒幻(ブラックファントム)に指摘されると
恨んでいても客人には変わりはないとのこと。
客人には相応の振舞いをするらしい。

「こんなものか。…なんで俺こんなに張り切ってんだろ」
「まあ、良いじゃない。張り切る事に悪い人はいないわよ。一夏君」
「しかもいつの間にか後ろに不法侵入者が二人ほどいらっしゃる」
そしていつのまにか更識姉妹が家の中に侵入していたりと
気疲れが多い一夏であった。

「お邪魔するわよーーー！！！」
「ちょっと、鈴さん！！近所迷惑ですわ！！」
「いいのよ！！これくらいは！！」
「鈴、セシリアの言う通りだぞ」
「箒の言う通りだよ、鈴」

「シャルロットに同感だ」
上から鈴、セシリア、箒、シャルロット、ラウラである。
「おい、何勝手に入ってんだ。お前ら」
「良いじゃないのよ！！もう、何度も入ってるんだし」
〜ちっ！だから、俺はお前らが嫌いなんだよ！！〜
「あ、いい匂いがする」
「本当ですわね」
一夏の言葉を無視しズカズカと居間の方へ入っていった。
〜おい、お前らの親は人の家に入る時は靴をそろえなさいって言われなかったのか！？
勝手に自分の家みたいにづかづかと入って良いって言われてんのかよ！！〜
一夏は片手に持っていたゴムへらを形が変わるほど強く握りしめていた。

「よし、準備出来たわね？はーい！！皆、注目！！」
楯無が突然、ソファーの上に立ち全員の注目を集めた。
「今年ももう残り少なくなったわ。今年は色々とあったけどその悔しさをバネに強くなっていきましょう！！
じゃあ、乾杯！！！！」
「「「「「かんぱーーーい！！！」」」」」
「あ、これ美味しい！！」
「ちょっと、鈴さん！！自分だけで独占するのやめてくれませんか！？」
「中々美味いわね。レシピ教えてもらおうかしら」
「もう、お姉ちゃんたら〜」
みな、それぞれ料理を食べ楽しそうに顔を緩ませながら楽しんでいた。

一夏以外は。
〜うざい！うざい！うざい！うざい！。何がレシピを教えてくれだ！！
自分でも作れるくせに聞いてんじゃねえよ！！どれだけ、俺を下に見れば気が済むんだ！！潰したい！！今すぐ、この場でこいつら全員をぶっ潰してやりたい！！〜
「一夏？」
「あ、ああ。なんだ？簪」
「ううん。なんだか一夏の雰囲気が怖かったから」
「気のせいじゃないのか？楽しもうぜ？」
「うん…」
一夏は食事に手を着けた。
〜ほんとに気のせいかな。なんだか一夏いらついてるみたいだけど〜
「ふ〜お腹いっぱい。もう食べれない」
「鈴さんは食べすぎなのですわ」
「あれだけ、ばかすかと流し込むように食べれば満腹で動けなくもなる」
箒は鈴を諭すように話した。
一夏が準備した食事は全て綺麗に完食されていた。
「よ〜し。食事も終わった事だし次はデザートに行こう！！」
楯無が次、行ってみよ〜、見たいなノリで言ったがそれを一夏は一気に弾いた。
「悪いが無い」
「へ？」
「デザートを食べたければ自分で買って来い。俺はお前らのお雇いシェフじゃねえんだ」
場の空気の温度が一気に下がったような感じがした。

「じゃ、じゃあ皆、言ったものは持って来たわね？」
雰囲気を変えるべく楯無がそう言うと全員が頷いた。
「ではこれより！！プレゼント交換を行うわよーーー！！！」
「「「おぉぉぉーーー！！！」」」
〰アホらし。さっさと終われ〰
「ルールは簡単。今から音楽を流すからその音楽が止まるまで
右回りにプレゼントを回していって頂戴。
音楽が止まった時点で持っているプレゼントがクリスマスプレゼントよ」
「面白そうだね、ラウラ」
「うむ」
「じゃあ、ｍｕｓｉｃ　ｓｔａｒｔ！！」
音楽が鳴り始めプレゼントを回していくが共通している物があった。
それは……
〰〰〰〰〰私のプレゼントが一夏に届くように！！〰〰〰〰〰
というものだった。まだ、簪は付き合っている事を言っていない為
未だに彼女たちは一夏の事を好きでいた。

そして音楽が止まりプレゼントの回転も止まった。
「じゃあ、中身を見てみましょう！！」
楯無が言うと全員が一夏が開ける箱に視線を傾けていた。
「これは……ネックレスか？」
「「「！！！！！」」」
「あ、私のだ」
声を上げたのは簪であった。
「そうか…ありがとな、簪」
「ふふ、こちらこそ。私のは何かな～？」

簪はドキドキしながら開けていくとそこには指輪があった。
「指輪だ」
「ああ、それ俺のだ」
「「「!!!!!」」」
他のメンバーは2回も衝撃が走った。
こんな事があるのか?と。
神は不公平だ!!とか
「じゃあ、一夏がつけて」

「了解」
一夏は指輪を取り簪の薬指につけた。
「ふふ、ありがと。一夏のもつけてあげる」
「ああ、頼む」
簪は他のメンバーの視線にも気付かずに一夏の首に手をまわしネックレスを着けた。
「ありがとな」
「ふふ」
その光景を羨ましそうに他のメンバーは見ていた。

「じゃあ、続いては告白ターイム!!!」
「「「!!!!!」」」
「この時間はまだ、皆に言っていない事を言う時間よ。
お題は何でも良いわ。自分の事でも良いし国の事でも良いし。
最初はじゃんけんで決めるわよ」
「「「「最初はグー、ジャンケン、ホイ!!」」」」
順番はラウラ、セシリア、シャル、楯無、箒、鈴、簪、一夏である。
「最初は私か……国の事だがつい先日ドイツの研究所が襲撃された」
「「「「!!!!!」」」」

「それも亡国機業（ファントムタスク）にだ。一夏」
「あ？」
「気を付けてくれ」
「へいへい」
「じゃ、じゃあ次は私ですね。私は……」
そう言う風に言っていき順番は簪へと回ってきた。
{ど、どうしよ！！皆に言ってないこととといえばあの事しか}
簪は一夏の方を見ると彼はうっすらと笑った。
{……言おう。皆にあの事を}
「じゃあ、簪ちゃん」
「う、うん。わ、私が言う事は……
い、一夏と付き合っている事です！！！」
「「「「え？」」」」
場の空気が一変し重いものとなった。

「そ、それってどういう意味？簪」
鈴は半泣きの状態で尋ねた。
「そ、その１１月の初めくらいから恋人同士なの」
「１か月以上……」
「ごめんなさい！！皆に言うのが遅くなって！！！」
簪は皆に頭を下げた。
「簪…」
箒が最初に声を出すと簪は体をビクつかせた。
「そ、そうか！！良かったじゃないか！！」
「そうだよ！！おめでとう！！簪！！」
「え？」
簪は驚いた様に見ると皆が祝福しているがそれはカラ元気で目に涙を浮かべて言っていた。
「そっか……簪ちゃんが先にとっちゃったか」
「お姉ちゃん」

「おめでと!!簪ちゃん!!」
楯無も若干、目に涙を浮かばせていた。
一夏はその席を何も言わずに外した。

「……よく分からねえな～女心は」
『そうね。科学がどれだけ発達しても心というのは本当に何も分からないのかもしれないわね』
一夏は月を見ながらそう呟いた。

そして、無事にパーティーも終わり全員が帰った後…
「きゃ!い、一夏?」
簪はソファに組み敷かれていた。
「悪い簪。もう、本当に我慢できない」
「ま、待って」
「待たない。どうせ今日も泊まるんだろ?」
「そ、そうだけど」
「お預けから何日経った?もう限界」
一夏が簪の首筋にキスをしようとした瞬間…
「せ、せめて」
「??」
「べ、ベッドでして」
簪は顔を真っ赤にさせ一夏に懇願すると一夏も顔を真っ赤にした。
「ああ、分かった」
一夏は簪をお姫様だっこして部屋へと向かった。
この後の事は18禁なのでお終い。
敢えて言うならば誰かの喘ぎ声が部屋に響いていた。

「あ？」
行為後、簪の眠る横で一夏は電話で目を覚ました。
簪が起きないように小声で喋りながら。
「誰ですか？」
『ゼロ、状況が変わったわ。今すぐ来て頂戴』
「…了解」
ゼロの任務が動き出す。

第三十四話　　想いは繋がり任務が始まる（後書き）

おはようございます！！
ケンです。
如何でしたか？次回は任務が始まります！！
今年も、もう終わりですね～
今考えているのが、お正月の番外編でも出そうかなと
思ってますが出さないかもですね～
それでは、行ってきま～す。

第三五話　殺人は人を変える

一夏はテーブルに簪への置手紙を置き指定された場所に行き車で送られた。
裏口から内部に入ると中では慌ただしく構成員達が走り回っていた。
まだ、日も昇っていないというのに。
その中心に幹部達がいた。
「何かあったのか、スコール」
「ええ。前に対ＩＳ用の武装が出来たって言ったでしょ。情報によれば
来年に移送されそこを狙うつもりだった。でも」
「でも？」
「その情報はダミーだったのよ」
「つまり俺達は泳がされて」
「いえ。アメリカとイスラエルは最近の治安から考えて極秘にアメリカ本土に
移送しようと世界には偽の情報を流したのよ」
「それで移送が今日だったのか？」
「ええ。貴方とエムには急いでその武装を破壊してきて欲しいの。
頼めるかしら」
「当たり前だ。その為にここに来た。エム」
「ああ、話は聞いていた。行くぞ、ゼロ」
一夏は仮面をかぶりゼロとなった。
『ええ。行きましょうか』

ゼロとエムが向かった後の話。
「それにしても誰がこの情報を」
実は亡国機業（ファントムタスク）がこの情報を知ったのは
匿名で送られてきた一通のメールだった。

初めは信用性が低いために処分されかけたがこのメールが裏の会社に来たことから念のため情報を漁った結果これだった。
「この人には感謝しないとね」

ゼロとエムは太平洋の上空にいた。
真下には一隻の大型のイージス艦が動いていた。
「周りには海軍の実戦演習とでも言ってあるのか」
『でしょうね。そうじゃないと周りの国から反発を喰らうからね』
「どうする、ゼロ」
『そうね～。試作型とはいえ向こうはＩＳを完全にシャットアウトする兵器、
レガリアだっけ？それがいくつか置いてある筈よ。二人一緒に突っ込んで
万一ＩＳを使用不能にされたらめんどくさいからね』
「なら、片方が上空に残り監視しておくという事か」
『ええ。どうする？エムが行く？それとも私が行く？』
「貴様は全範囲（オールレンジ）の攻撃がある。それに対して
私はどちらかというと遠距離に偏っているからな」
『なら、私が行こうかしら』
「ああ、頼む」
『ま、ひとまず一発お見舞いして頂戴』
「任せろ」
エムはピットと巨大な銃を出し照準を船に合わせた。
「行くぞ」
『ええ』
エムの合図とともに青い光が何本も船に向かって落とされた。

「今日は天気が悪いな」
「ああ」
船上では複数人、監視員が周りの海を監視していた。
今日は曇天で視界が悪く向こうの方がよく見えなかった。
その時、船が大きく揺れ火の手が上がった。
「な、なんだ!?」
『警告!!敵襲!!班員はすぐさま自分の位置に配置しろ!!』
そのサイレンは敵襲を放送するサイレンだった。
船は何発もＢＴ兵器による狙撃を受け、さらには偏向射撃（フレキシブル）により様々な方向から来ていた為、どこからされているのかすら不明だった。
「まさか報告にあった組織か!!」
「あの武器を持ってこい!!」
その船の船長らしき人物が声を荒げた。
「せ、船長!!あれはまだ試作段階では!!」
「構わん!!今すぐ持ってこい!!」
「は!!」
船員が取りに行こうとした時一人の人物が船に降り立った。

「何者だ!!貴様!」
『答える義務は無くってよ?』
船員はその人物に銃を向け威嚇していた。
「貴様の目的はなんだ!!」
『あなた方が開発されたレガリアの破壊及び設計図の消滅』
「そんな事はさせん!!世界の警察であるアメリカがさらに上位に立てる
この兵器を貴様らなんぞには渡さん!!撃て!!」
その合図とともに一斉に発砲していくがＩＳに人間の兵器は無意味だった。

全ての弾丸は届く前に黒い炎により焼き尽くされた。
『全部燃えちゃいなさい！！ダークネス・オーバーロード！！』
黒い炎の火柱が空に昇ったが船には何も被害は無かった。

「脅しか！！貴様！！」
『いいえ。脅しなどというものはわたくしはしない主義ですのよ。
さあ、逃げ回りなさい。哀れな人たち』
「なんだと！？」
「せ、船長！！あれを！？」
一人の海兵が空を指差しその方向を見るとそこには黒い炎の塊が
大量にこちらに向けて落ちてきていた。
「「「「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」」」
その塊は着弾すると一気に燃え上がり本来燃える筈のない鉄が燃やされ
溶かされていくのが見えた。なかには海兵に燃え移ったものもあり
全員海に飛び込んでいった。
「ま、待て！！貴様ら、逃げるな！！それでも合衆国の海兵か！！」
『皆、命の方が大切なのよ。そんな忠誠心なんか命惜しさには
無意味でちっぽけな物よ。船長さん』
ゼロがそう言った瞬間ＩＳが強制解除された。

『あら？』
「ふはははははははは！！！！！どうだ！？これがレガリアの力
だ！！
ＩＳに普段頼ってる貴様など、赤子の様なものだ！！捕えろ！！！」
周りを見渡すと海兵が四人ゼロを囲むようにレガリアを設置していた。
「「「「は！！！！！」」」」
何人も海兵がゼロに近寄っていくが全員、殴り飛ばされていった。
あるものはあごを殴られ気絶しあるものは地面に叩きつけられるなど

海兵が圧倒されていた。
『ＩＳになんて頼ってるのはただの平和ボケした馬鹿だけよ』
「な！！！」
訓練をしている現役海兵が一人の襲撃者によって半数以上が倒された。
『さてと、ここで一つ提案があるわ』
海兵たちはその言葉に耳を貸していた。
『命が惜しい奴は全員、ここから消えなさい。そうすれば私は何もしないわ。
ここに残れば全員、み・な・ご・ろ・し確定よ？』
「お、俺は逃げるぞ！！！」
一人の海兵が救命ボートを出しそこに飛び乗っていた。
「俺もだ！！こんな所で死にたくない！！」
「お、おい待て！！貴様ら！！」
誰も船長の声には耳を貸さず一目散に武器を捨て救命ボートに必死にしがみつき戦場を離れた。

船に残ったのは船長、ただ一人だった。
他の船員は救命ボートで避難していた。
『残念ね、船長さん。あなた以外全員生きる事を選択しちゃったわね。
ま、あれが人間の本能という物よ。どんなに屈強でどんなに国に忠誠を
誓っている人でも自分の命が最も大事な物よ』
「く、くそ！！」
船長は銃を構えたがその腕は恐怖により震えており
照準が定まっていなかった。
『あ、そうだわ』
ゼロが思い出したように話し始めた。
『あの時、確かに逃げれば何もしないって言ったけどそれは

‘私は”何もしないと言っただけよ』
「どういう意味だ!?」
『だ~か~ら~私は一人で来たとは言ってなくってよ』
船長に戦慄が走った。確かに船に降り立ち破壊行動をしたのは一人だけ。彼らが見たのも一人だけ。だが、戦いに嘘はつきものである。
例えばそこには一人しかいなくても‘‘仲間が複数どこかにいる”等というのがいい例だ。
そう、どこかにいるという事が。
「ま、まさか!!!!」
船長が後ろを振り向き船員が逃げた方向を見た瞬間、救命ボートが爆発を起こした。
僅かに見えたのは大量のミサイルの様なものとレーザーの様なものが見えただけ。
上を見上げるともう一機のＩＳ、エムがいた。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!」
『ふはははははははははは!!!!!どうかしら!?仲間を救えない
いらつきは!!所詮仲間なんて必要ないのよ!!』
ゼロは狂ったように笑い始めた。
その異様な光景にエムは背筋が凍った。
殺人はこれほどまでに人を変えるのかという事に。
『さあ、お終いよ。貴方もあの人達のもとに送ってあげるわ。
呪うなら自分の弱さを呪いなさい。さようなら』
船に銃声が響き船長が頭から血を流し倒れ伏した。

第三五話　殺人は人を変える（後書き）

皆さんこんにちわ～ケンです。
如何でしたか?今回の任務で一夏は踏み外してはいけない道を踏み外しましたね～こうなっては後戻りはできない。最後にあるのは生か死か、この二択でしょうね～
それでは、さようなら～

ＰＳ．割とまじでこの先の展開どうしようか悩み中～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5542x/

インフィニットストラトス　　白の消失、黒の出現

2011年12月18日11時50分発行